

白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一四―六

白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、動物園整備工事に伴う白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

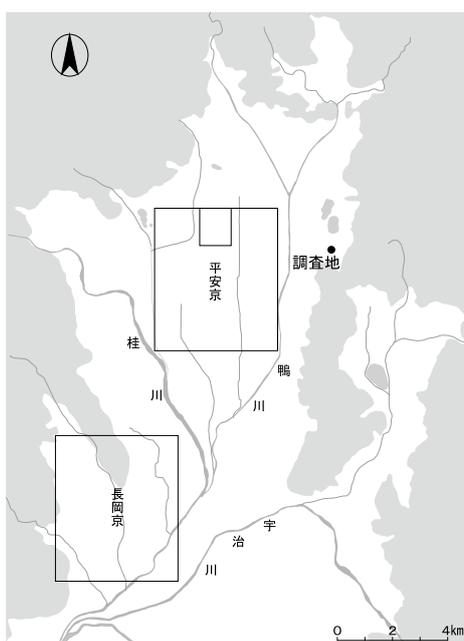
平成26年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡（文化財保護課番号 13 R 144）
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎法勝寺町（京都市動物園）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2014年8月25日～2014年9月24日
- 5 調査面積 190㎡
- 6 調査担当者 近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「吉田」・「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
付章：小野映介（新潟大学）・河角龍典（立命館大学）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構	9
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 瓦類	14
(3) 土器類	21
5. ま と め	22
付章 京都盆地東部に位置する白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡の地質	26

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区西半部全景（東から）
		2 調査区西半部西区全景（東から）
		3 調査区西半部 瓦出土状況（南から）
図版2	遺構	1 調査区東半部全景（東から）
		2 調査区東半部 瓦出土状況（西から）
		3 調査区東半部 池土3検出状況（西から）
図版3	遺物	瓦類1
図版4	遺物	瓦類2
図版5	遺物	瓦類3
図版6	遺物	土器類

挿 図 目 次

図1	調査区配置図（1：1,000）	1
図2	調査前風景（東から）	2
図3	調査前風景（東から）	2
図4	埋戻し風景（南東から）	2
図5	作業風景（南東から）	2
図6	断割作業風景（北西から）	2
図7	断割断面（南東から）	2
図8	調査地と周辺調査位置図（1：2,500）	5
図9	北壁断面図1（1：50）	10
図10	南壁断面図（1：100）	11
図11	西壁断面図（1：100）	12
図12	北壁断面図2（1：100）	12
図13	調査区平面図（1：150）	13
図14	瓦拓影・実測図1（1：4）	15
図15	瓦拓影・実測図2（1：4）	16
図16	瓦拓影・実測図3（1：4）	17
図17	瓦拓影・実測図4（1：6）	18
図18	瓦拓影・実測図5（1：4、瓦37・38のみ1：2）	19
図19	土器実測図（1：4）	20
図20	墨書土器実測図（1：2）	21
図21	墨書土器（34）付着麻繊維顕微鏡写真	21
図22	池検出地点位置図（1：1,500）	24
図23	池検出地点土層柱状図（1：50）	25

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	14

付 表 目 次

付表 1	瓦観察表	28
付表 2	土器観察表	30

白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡

1. 調査経過（図1～7）

今回の調査は、京都市左京区岡崎法勝寺町に所在する京都市動物園内で実施した。京都市動物園の敷地は、平安時代後期の白河街区内の南東に位置し、白河天皇によって造営された法勝寺の南半部に推定されている。また、一帯は弥生時代から古墳時代の集落遺跡である岡崎遺跡の南東部にも該当している。

京都市動物園では2009年に策定された「京都市動物園構想」に基づき、園内施設の全面的な再整備が計画された。これに伴い2009年より遺跡の残存状況の把握を目的とした試掘調査、発掘調査が実施されてきた。これらの調査により、法勝寺主要伽藍である八角九重塔、阿弥陀堂周辺の状況を明らかにし、それらの遺構は調査後、建物などの設計変更や盛土などによって地中保存されている。2012年には、今回の調査対象地となった「ゾウの森」を含めた11箇所、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により試掘調査が実施された。「ゾウの森」では3箇所の調査区を設定し、平安時代後期の法勝寺に関連すると思われる池が検出された。試掘調査の結果に基づき遺跡の保存のための工事による掘削可能深度を提示し、遺跡を地中保存することとなった。しかし、今回の調査地点では提示した掘削可能深度より工事による掘削

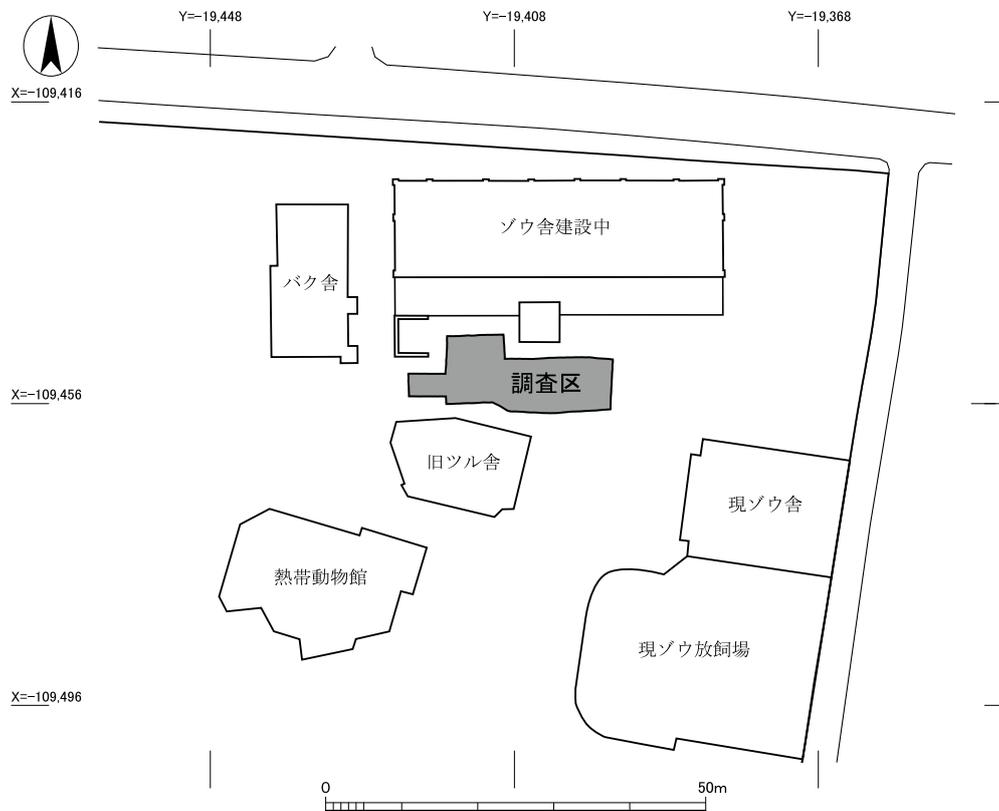


図1 調査区配置図（1：1,000）



図2 調査前風景（東から）



図3 調査前風景（東から）



図4 埋戻し風景（南東から）



図5 作業風景（南東から）



図6 断割作業風景（北西から）



図7 断割断面（南東から）

が深くなるため、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は文化財保護課の指導により、池内及び西汀の検出が想定される箇所に、西端5.7m、東端8m、南端30.5m、北の一部と西の一部が突出した調査区を設定した。北側で建設中のゾウ舎建物の足場やフェンスが近接すること、調査区東端に既存埋設管が残存することなどから、文化財保護課と協議を行い、その指示で調査区を狭めたため、当初予定の調査面積250㎡から約190㎡となった。また、残土置き場を確保するため、東西2区に分割し、反転調査とした。

2014年8月25日より西半部の重機掘削を開始した。西半部重機掘削分の排土は大半を場外搬出した。その後人力掘削に切り替えて遺構の掘削を行った。遺構掘削完了後、地山層の断割と西側幅

3 m、長さ5 m分の補足調査を重機掘削により行い、記録を取って埋め戻した。これに引き続き、東半部の重機掘削を行った。その後、人力掘削に切り替えて遺構の掘削を行った。遺構掘削完了後、西半部と同様に地山層の断割調査を重機によって行い、記録作成後、埋め戻した。なお、一部排土を場外搬出したため、現況の残土のみで復旧した。遺構は、随時平面図・断面図を作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査の進展に伴い適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、当事業における検証委員である京都産業大学の鈴木久男教授、龍谷大学の國下多美樹教授の視察を受けた。

地山層の断割調査の際には、新潟大学の小野映介准教授、立命館大学の河角龍典教授のご教示を得た。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は、京都盆地の北東に位置し、弥生時代から古墳時代の集落である岡崎遺跡や平安時代後期（11世紀後半から12世紀）に院政の中心地となった白河街区跡にあたる。当地周辺は、北側は吉田山丘陵、東側には東山山麓があり、その間を縫って北東から流れる白川によって形成された扇状地と、鴨川左岸の沖積地からなる。地形は北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、その地形に沿って流れる弥生時代から古墳時代の自然流路が、これまでの調査で見つかっている。

白河は平安京と東国を結ぶ東海道、東山道に近接し、交通の要衝であった。平安時代前期には、嵯峨野や宇治などと並ぶ景勝地であったことから貴族の別荘や寺院が造られ始める。平安時代中期には繁栄を誇る藤原氏の別荘地となり、平安時代後期には藤原道長の孫である左大臣藤原実家が代々の別荘であった白河殿（白河院）を白河天皇に献上した。その地に天皇の発願で法勝寺の造営が始まった。平安京左京域の市街地拡大と共に、この法勝寺の造営を機に鴨川左岸の白河に街区が形成される。白河街区は平安京の二条大路延長である二条大路末と法勝寺を基軸として地区割りされ、その中に天皇や皇后の御願寺や院御所が造られた。法勝寺造営後には、堀河天皇による尊勝寺、鳥羽天皇による最勝寺、その皇后待賢門院璋子による円勝寺、崇徳天皇による成勝寺、近衛天皇による延勝寺が造営され、御願寺はいずれも「勝」の字を寺名に付したことから、総称して「六勝寺」と呼ばれた。法勝寺はその筆頭寺院である。

法勝寺の造営は承保二年（1075）に始まり、金堂・講堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂・築地・門などの主要伽藍が造られ、承暦元年（1077）には落慶供養が行われる（「水左記」）。永保元年（1081）には、金堂前面の中島に八角九重塔の造営が開始され、永保三年（1083）に落慶供養が行われている（「扶桑略記」）。法勝寺の寺域については確定していないが、文献史料や発掘調査などの成果から、現在の京都市動物園西側の広道（岡崎道）を西限とし東西2町以上、南限は押小路末北辺以南、北限は冷泉小路かそれ以北の2町以上あったと考えられている。このような広大な寺域は、その後

に造営される六勝寺の中でも最大であり、高さ80mを超える八角九重塔は白河天皇の院政の権力を示すものであった。

白河街区は院政期の繁栄と共に拡大したが、平氏などの武士の台頭により院政が衰退すると、その機能は次第に失われた。その中で法勝寺などの寺院は存続するが、応仁元年(1467)に始まった応仁・文明の乱によって焼亡し、法勝寺は廃絶したと考えられる。その後一帯は畑地や水田として利用され、江戸時代には都市近郊農業生産地となり、愛宕郡岡崎村と呼ばれた¹⁾。

幕末になると京都は政治の渦中になり、岡崎は二条城や御所に近いこと、新たに藩邸を建てるための土地に余裕があることなどから大名屋敷などが林立する。しかし、明治維新後、東京遷都により京都全体が衰退し、岡崎に造られた大名屋敷も数年後には取り壊され、再び農業地帯となる。

明治23年(1890)には、京都を活性化させるための近代化事業の一環として、岡崎を中心とした琵琶湖疏水が計画される。さらに明治28年(1895)には平安遷都1100年記念祭として平安神宮が創建され、周辺は内国勸業博覧会会場地となる。その後博覧会会場地は岡崎公園となり、博覧会の動物館は明治36年(1903)に京都市動物園として開園し、京都市美術館、京都府立図書館、京都会館、勸業館などが並ぶ京都屈指の文化ゾーンとなる。

第二次世界大戦後の昭和21年(1946)には、岡崎地域にある主要な文化施設はアメリカ軍により接収される。動物園の敷地南半もその際に接収され、八角九重塔跡地であった「塔の壇」も削平され、整地される。

(2) 周辺の調査(図8、表1)

弥生時代から古墳時代 白川は北東から南西方向に低い旧地形に沿って流れており、弥生時代から古墳時代の遺物を含む自然流路を各所で検出している(調査6・13・14・19・20・36)。古墳時代の掘立柱建物は調査9・23で検出しており、流路からはほとんど磨滅のない完形の土器を含む多量の土器が出土することから、周辺には集落が存在することが想定される。

平安時代 法勝寺跡では、古くから寺域推定地や「塔の壇」周辺で瓦などが採集されていたが、京都市動物園内での調査2において初めて遺構が確認された。見つかったのは小礫を敷いた洲浜のある平安時代の池の東汀である。岸は少なくとも一度修築され、修築時には護岸に平安時代後期の瓦が大量に使用されていた。これは池の北東部にあたり、この池の対岸と思われる池の汀が調査37・41で、池跡は調査9・27・33・37・41・43などで見つっている。また、南・西部の池の東西の汀や池跡を調査10・14・24・32・34で、調査36では八角九重塔北側で北汀が見つかり、創建当初は塔が建つ中島の周囲に池が廻るという文献史料の記述が確認されたと考えられている。池は調査2を除き洲浜や池底の貼り土は検出されていない。

調査3は二条通の北側に面して一段高い場所にあり、法勝寺金堂北西部の礎石据付穴や基壇西縁の延石などが見つかった。その後、調査13で、金堂の東回廊北東部の礎石据付穴や北縁雨落溝が見つかり、金堂と東西回廊、回廊に取り付く経蔵と鐘樓の位置が復元された。調査33では、約81mの高さがあったとされる八角九重塔基壇の掘込地業を検出し、石と粘土を交互に入れ込み強固

に固めていたことがわかった。調査36では、阿弥陀堂基壇の版築層の一部が見つかった。

法勝寺の西辺は調査6・18で南北方向の溝が見つかり、法勝寺西限の溝と推定されている。また、調査40で平安時代から室町時代の南北溝を検出しているが、この溝を西限と断定するに至っていない。その他、調査17では平安時代後期から鎌倉時代の瓦とともにロストル窯の牀の破片や焼成粘土塊が多量に出土し、近隣に法勝寺あるいは周辺寺院に瓦を供給した瓦窯跡や工房跡が存在した可能性がある。

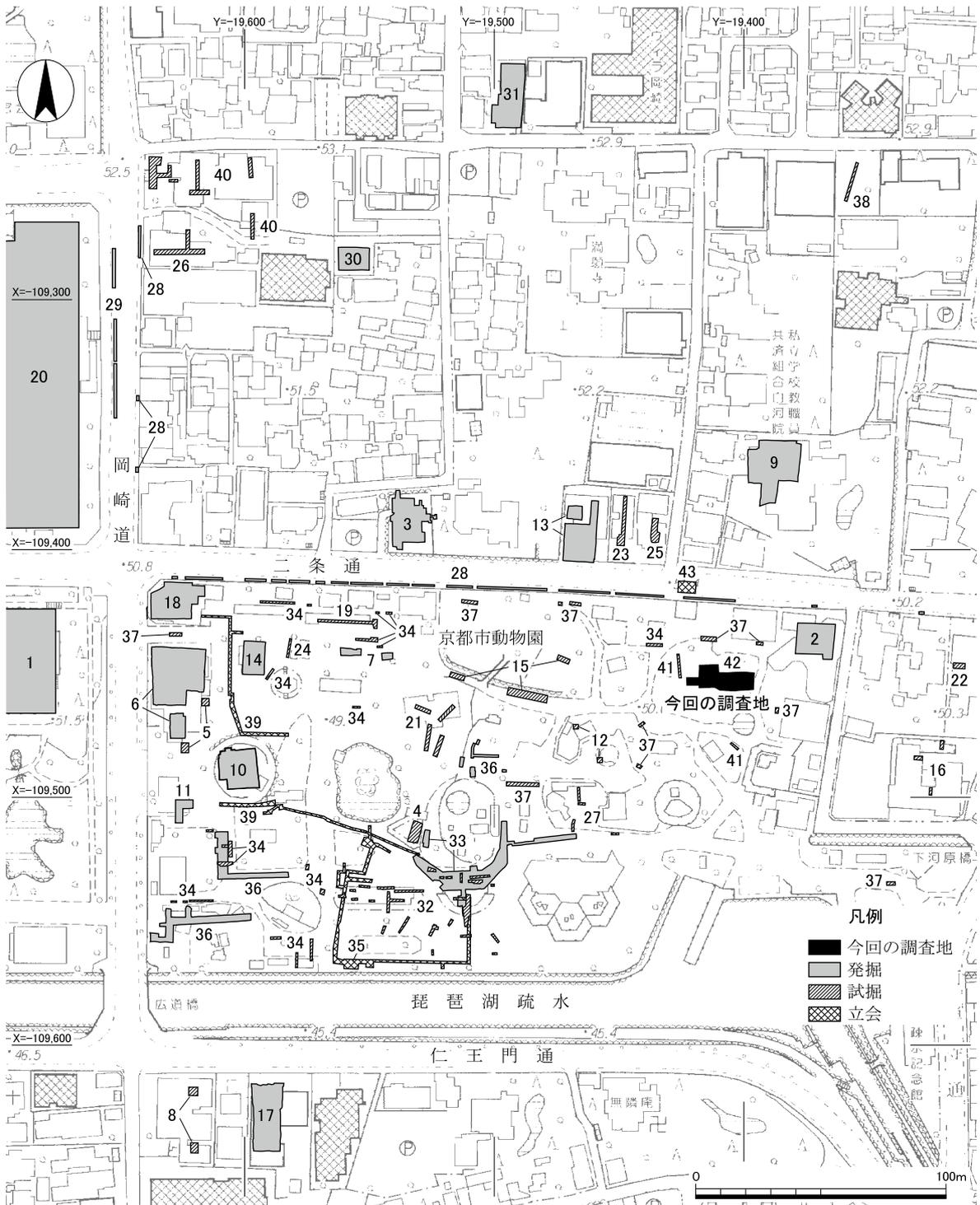


図8 調査地と周辺調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺調査一覧表

	推定位置	種類	調査組織	調査略記号 番号	所在地	調査期間	調査 面積 (m ²)	主な遺構	文献
1	(円勝寺)	発掘	円勝寺発掘調査団		円勝寺町 (京都市美術館)	1970.07.13～09.30		平安～鎌倉：礎石据付穴・掘立柱建物・南北方向築地掘形・雨落	1
2	園池	発掘	六勝寺研究会		(動物園)	1972.09.01～10.12		平安後期?：池の汀	2
3	金堂	発掘	市文観保護課		法勝寺町124	1975.02.03～03.12	150	金堂基壇・礎石据付穴・西縁延石(凝灰岩)・雨落溝	3
						1975.10～11	200		4
4	八角九重塔	試掘	研究所	79KS-Z0001	(動物園)	1979.02.19～26	32	平安後期：池跡?	5
5	西辺	試掘	研究所	80KS-Z0002	(動物園)	1981.02.02～05	21	古墳後期：包含層、平安：包含層	6
6	西築地	発掘	研究所	81KS-Z0003	(動物園)	1981.08.03～10.06	508	古墳：自然流路、平安後期：井戸・土坑・柱穴、室町：南北溝・土坑	7
7	鐘楼	発掘	研究所	81KS-Z0004	(動物園)	1981.08.20～25	27	平安後期：整地層	
8	南側	試掘	研究所	82BB-KS031	円勝寺町149-3他	1981.10.20		平安末期：包含層・土坑	8
9	園池	発掘	研究所	82KS-OF	法勝寺町16	1982.09.16～11.15	400	古墳後期：掘立柱建物、平安前期～中期：溝、平安後期～室町：池	9
10	園池	発掘	研究所	82KS-Z0005	(動物園)	1983.01.10～02.01	213	時期不明：掘立柱建物・土坑	10
11	西辺	発掘	平安京調査会	85KS-Z0006	(動物園)	1985.06.17～20	41	平安～鎌倉：柱穴・東西溝	11
12	中央	試掘	研究所	85BB-KS001	(動物園)	1985.04.08		平安後期：包含層、鎌倉：包含層	12
13	金堂東回廊	発掘	研究所(国補)	86KS-TS	法勝寺町30	1986.04.01～05.15	247	古墳：流路、平安後期：金堂東回廊(雨落溝・礎石据付穴)	13
14	園池	発掘	研究所	87KS-Z0008	(動物園)	1987.09.07～28	110	弥生末期～古墳初頭：流路、平安後期：池	14
15	金堂前面	試掘	研究所	87KS-Z0007	(動物園)	1987.08.10～19	70	平安後期：南北溝	15
16	伽藍東辺	試掘	研究所	88BB-KS011	法勝寺町55他	1988.07.06		鎌倉～江戸：流路	16
17	南側	発掘	研究所	88KS-SS	円勝寺町149-2他	1988.11.07～ 1989.01.30	394	平安後期～鎌倉：溝・流路、室町：掘立柱建物・溝・自然流路	17
18	西築地	発掘	研究所	89KS-Z0009	(動物園)	1989.04.24～06.20	252	旧石器：動物足跡、平安～室町：南北溝(側溝?)、江戸：掘立柱建物	18
19	金堂西回廊?	試掘	市埋セ	No.79 (91R252)	(動物園)	1991.11.25	27	古墳：流路堆積	19
20	(最勝寺)	発掘	研究所	91KS-OG003	最勝寺町 (岡崎グラウンド)	1991.09.30～ 1992.09.17	10041	古墳：流路、古墳後期：古墳、平安後期：二条大路末の北築地と北側溝	20
21	金堂前面	試掘	市埋セ	No.47 (92R020)	(動物園)	1992.04.27、05.25	48	平安後期：東西溝・土坑状遺構	21
22	伽藍東辺	試掘	市埋セ	No.72 (93R538)	(動物園)	1994.04.04	34	顕著な遺構なし	22
23	金堂東回廊	試掘	市埋セ	No.59 (95R206)	法勝寺町29	1995.09.27	32	古墳後期：柱穴、平安中期：土坑	23
24	園池	試掘	市埋セ	No.57 (98R131)	(動物園)	1998.07.08	6	時期不明：東西溝	24
25	金堂東回廊	試掘	市埋セ	No.56 (99R135)	法勝寺町29-2	1999.07.07	10	平安後期：整地層・金堂東回廊東辺の東へ落ちる段差	25
26	西辺	試掘	市埋セ	No.17 (99R355)	南御所町35-15	2000.01.11	51	平安：瓦廃棄土坑	26
27	園池	試掘	市埋セ	No.12 (02R460)	(動物園)	2003.02.24	16	平安後期：池跡	27
28	金堂前面	発掘	研究所	2004KS-JC001	法勝寺町・南御所町(二条通)	2005.01.11～03.09		平安後期：土坑	28
29	西側	発掘	研究所	2005KS-JC002	南御所町(岡崎道)	2005.07.19～09.21	76	古墳前期：土坑	29
30	北西部	発掘	研究所(国補)	2007KS-IH001	南御所町(二条通)	2007.07.09～27	113	中世末～近世：南北溝(堀)・土塁	30
31	北限	発掘	研究所	2007KS-TA001	天王町70他	2007.10.24～11.27	265	平安後期：土坑、室町後期：溝・土坑・柱穴など	31
32	八角九重塔園池	試掘	市文市保護課	No.16 (09R403)	(動物園)	2009.12.21～25 2010.02.09～17	126	28Tr、八角九重塔の掘込地業、中島を囲む池確認	32
33	八角九重塔園池	発掘	研究所(国補)	2010KS-Z0010	(動物園)	2010.05.17～08.02	370	平安後期：八角九重塔基壇地業・池跡	33
34	園池	試掘	市文市保護課	No.70 (09R580)	(動物園)	2010.04.13～15、 12.15～16	315	18tr、平安後期：阿弥陀堂基壇地業・池跡	34
35	園池	立会	研究所	2010BKS258 (09R403)	(動物園)	2010.11.04～ 2011.03.11		平安後期：池跡	35
36	阿弥陀堂八角九重塔園池	発掘	研究所(国補)	2011KS-Z0011	(動物園)	2011.06.06～08.09	315	古墳前期：流路、平安後期：溝・土坑・阿弥陀堂基壇・池跡・八角九重塔基壇地業	36
37	園池	試掘	市文市保護課	No.90・91 (12R305・010)	(動物園)	2012.04.16～18、 09.24～25	66	11tr、平安後期：池跡	37

	推定位置	種類	調査組織	調査略記号 番号	所在地	調査期間	調査 面積 (㎡)	主な遺構	文献
38	北東部	試掘	市文市 保護課	No.89 (12R143)	法勝寺町4-1-3	2012.09.19	16	平安後期：掘り込み地業	38
39	園池	立会	研究所	2011BB-KS306	(動物園)	2011.12.14～ 2012.11.05		平安後期：池跡	39
40	北西辺	試掘	市文市 保護課	No.101 (13R025)	南御所町35-1	2013.04.15、09.02 ～04、12.12～13	113	平安～室町：南北溝	40
41	園池	試掘	市文市 保護課	No.103 (13R144)	(動物園)	2013.07.29	9	平安後期：池の北汀	41
42	園池	発掘	研究所	2014KS-Z0012	(動物園)	2014.08.25～09.24	190	平安後期：池跡	本 報 告
43	園池	立会	市文市 保護課	2014BB-KS030	南御所町他	2014.04.21～継続中		池跡	

※所在地は字名である「岡崎」を省略して表記した。また、単に(動物園)としたものは法勝寺町内での調査である。

※調査組織の表記は以下の様に略した。

市文観保護課：京都市文化観光局文化財保護課、研究所：(財)京都市埋蔵文化財研究所・(公財)京都市埋蔵文化財研究所、
市埋セ：京都市埋蔵文化財調査センター、市文市保護課：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

文献一覧（表1の文献番号と一致）

- 1 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上・下）」『佛教藝術』82・84 1971・1972年
- 2 六勝寺研究会「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-II 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 3 杉山信三・梶川敏夫「法勝寺金堂跡発掘調査概要」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-II 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 4 「法勝寺金堂跡第II次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』京都市文化観光局文化財保護課 1976年
- 5 「昭和54年度試掘・立会調査一覧表」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 6 「昭和55年度試掘・立会調査一覧表」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 7 鈴木廣司・平方幸雄「法勝寺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 8 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
- 9 辻 裕司・平方幸雄「法勝寺跡（1）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 10 菅田 薫「法勝寺跡（2）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 11 小森俊寛「白河街区3」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 12 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 13 上村和直・辻 裕司『法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 14 平方幸雄「法勝寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 15 辻 裕司「法勝寺跡（試掘）」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 16 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年

- 17 内田好昭「白河街区・岡崎遺跡1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 18 内田好昭「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 19 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 20 内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 21 長谷川行孝「法勝寺跡 No.47」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 22 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
- 23 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 24 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 25 堀 大輔「法勝寺跡 No.56」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 26 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 27 長谷川行孝「法勝寺跡 No.12」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 28 吉村正親・長宗繁一『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004 - 17 2005年
- 29 吉村正親『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005 - 9 2005年
- 30 網 伸也「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 31 辻 裕司『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007 - 9 2007年
- 32 家原圭太「法勝寺跡・岡崎遺跡1 No.16」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 33 柏田有香「法勝寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 34 堀 大輔「法勝寺跡・岡崎遺跡2 No.70」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 35 吉本健吾「法勝寺跡・岡崎遺跡 (10KS258)」『京都市内詳細分布調査報告書 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 36 高橋 潔「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 37 家原圭太「法勝寺跡・岡崎遺跡2 No.90・91」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 38 西森正晃「法勝寺跡・岡崎遺跡1 No.89」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 39 吉本健吾「法勝寺跡・岡崎遺跡 (11KS306)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 40 奥井智子「法勝寺跡・岡崎遺跡 No.101」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 41 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は現状では京都市動物園の整地によって、西から東に向かってゆるやかに下降している。調査前の地表面の標高は最も高い南西角で51.45m、最も低い北東角で51.0mである。

基本層序は、地表下1.6mまで盛土及び近・現代層、その下には江戸時代の耕作土層（厚さ0.3m）が堆積する。その下、地表下1.85mで平安時代後期の遺物を含む池埋土を検出した。池埋土上面の標高は49.4mである。池底は弥生時代から古墳時代の遺物を含む自然堆積層で、その上面の標高は48.8mである。地表下3.7m（標高47.4m）までを部分的に断ち割って確認したところ、地表下2.83m（標高48.45m）まで細砂～粗砂の氾濫堆積物層であり、一部では粗砂とシルト層が互層となる。その下は上から順に、緑灰色シルト～粘土層、暗緑灰色シルト～粘土層、火山灰層、灰色極細砂層、暗緑灰色シルト層、緑黒色極細砂層、暗青灰色シルト～粘土層、黒色細砂～極細砂層、オリーブ黒色細砂層が堆積している。火山灰層（厚さ約0.1m）は始良Tnと考えられる（付章参照）。

(2) 遺構（図9～13、図版1・2）

調査区全体で池跡を検出した。この池跡は位置関係や周辺の調査結果からみて、法勝寺の園池跡と考えられる。

池 埋土は細砂から粗砂に礫を中量含む上層（池土1）と、細砂から中砂に粘質土を含む下層（池土2）の2層に分けられる。一方、調査区東部には、平安時代の園池であった際の堆積土（池土3）と思われる黒褐色粘質土層が残存する。池土1、池土2ともに締まりのない土層で、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は平安時代後期の土師器、瓦などが大半であるが、池土1からは室町時代後半の土師器が1点出土している。この出土遺物から、池の廃絶時期は室町時代後半以降と考えられる。

池底には貼り土などの施設はみられず、白川砂を基盤とする自然堆積層が池底となる。池底部の標高は、調査区北西隅で49.1mとやや高く、北東部・南東部では48.8m前後、南西部で48.9mとなる。池底が北西方向に上がる様相がみられ、汀に近い可能性が考えられる。東半部の池底は平坦で安定しているが、西半部は凹凸が激しく、窪みには瓦が集中して出土した箇所がある。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	池	
江戸時代	耕作溝	

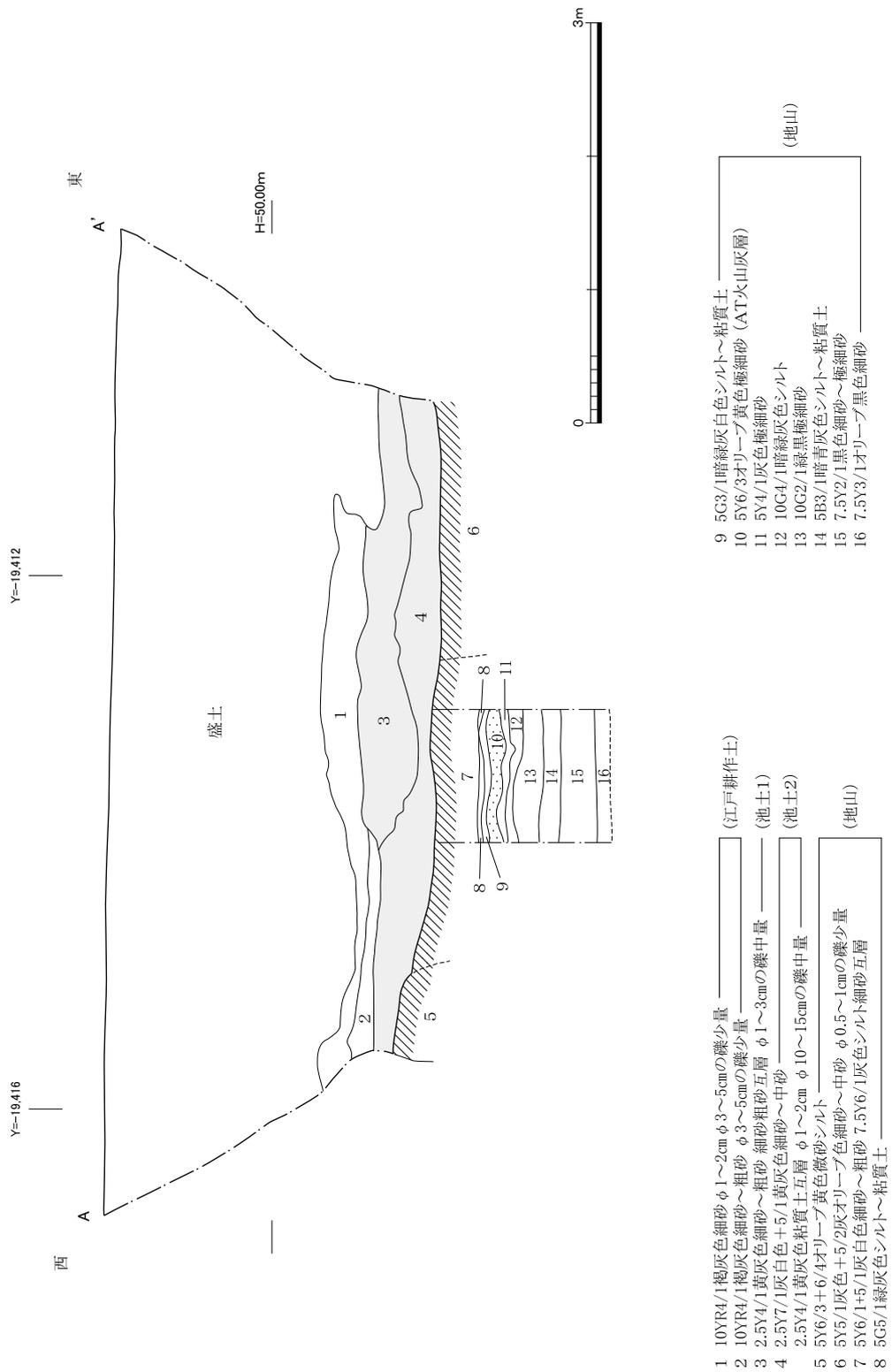


図9 北壁断面図1 (1 : 50)

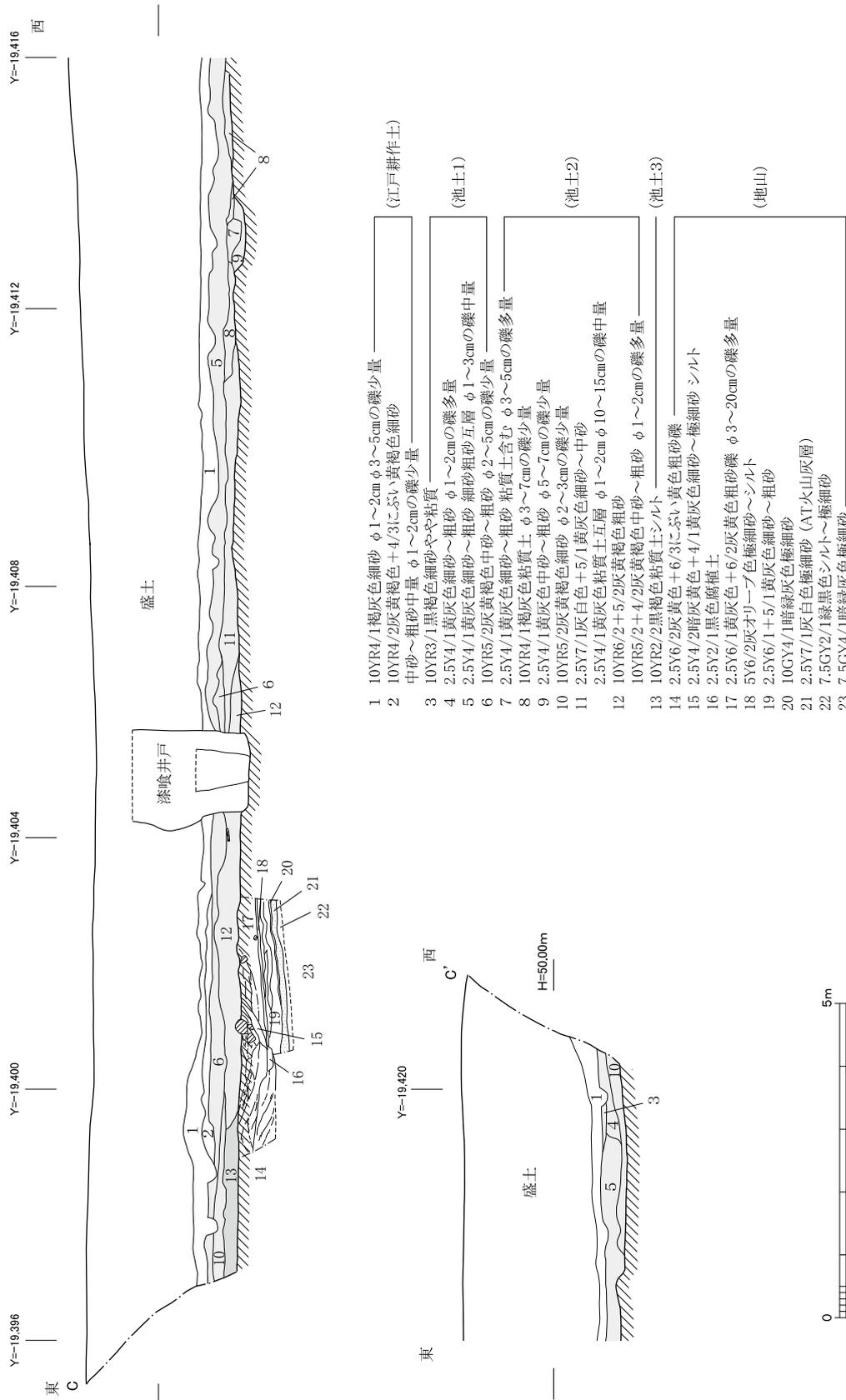
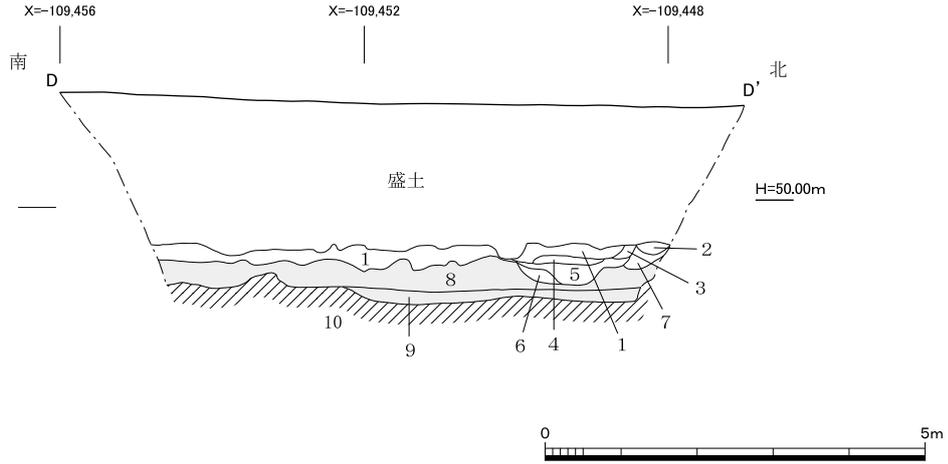
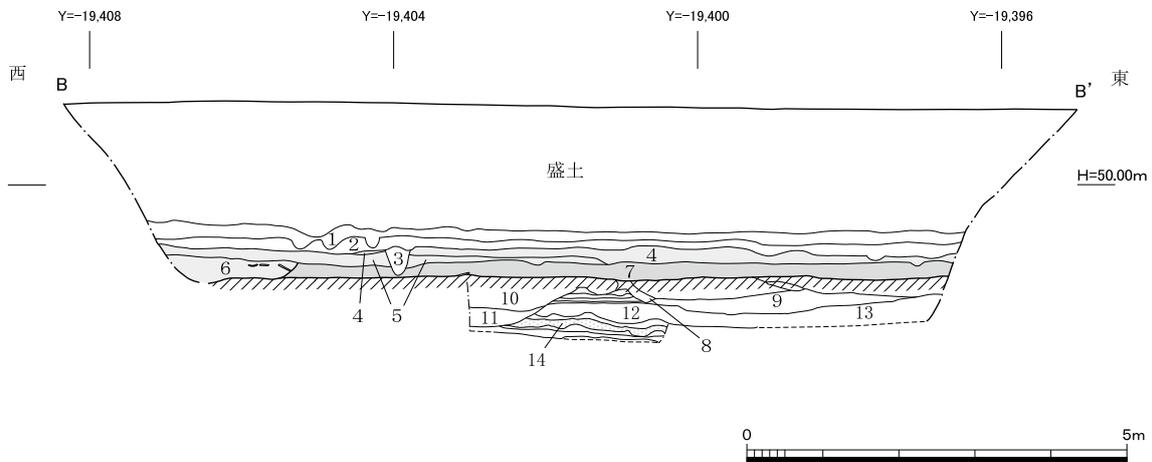


図10 南壁断面図 (1 : 100)



- 1 10YR4/1 褐灰色細砂 φ1~2cm φ3~5cmの礫少量 (江戸耕作土)
- 2 10YR4/1 褐灰色細砂~粗砂 φ3~5cmの礫少量
- 3 2.5Y4/1 黄灰色+4/3 オリーブ褐色細砂~中砂 φ0.5~1cmの礫少量
- 4 2.5Y4/1 黄灰色+4/2 暗灰黄色細砂~中砂 φ1~2cmの礫少量
- 5 2.5Y4/1 黄灰色+4/2 暗灰黄色細砂~粗砂 φ1~3cmの礫中量 (耕作溝)
- 6 2.5Y4/1 黄灰色+4/2 暗灰黄色中砂~粗砂 φ1~2cmの礫中量
- 7 2.5Y4/1 黄灰色+5/2 暗灰黄色細砂~中砂 φ1~2cmの礫少量
- 8 2.5Y4/1 黄灰色細砂~粗砂 細砂粗砂互層 φ1~3cmの礫中量 (池土1)
- 9 2.5Y3/1 黒褐色中砂~粗砂 2.5Y4/1 黄灰色粘質土互層 φ1~2cmの礫多量 (池土2)
- 10 5Y5/1 灰色+5/2 灰オリーブ色細砂~中砂 φ0.5~1cmの礫少量 (地山)

図11 西壁断面図 (1:100)



- 1 10YR4/2 灰黄褐色+4/4 褐色細砂 中砂~粗砂中量 φ0.5~1cmの礫少量 (江戸耕作土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色+4/3 にぶい黄褐色細砂 中砂~粗砂中量 φ1~2cmの礫少量
- 3 10YR5/1 褐灰色+5/2 灰黄褐色細砂 φ0.5~1cmの礫少量
- 4 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ2~3cmの礫少量 (池土1)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1~3cmの礫中量
- 6 10YR6/2+5/2 灰黄褐色粗砂 φ1~2cmの礫多量 (池土2)
- 7 10YR5/2+4/2 灰黄褐色中砂~粗砂 φ1~2cmの礫多量 (池土3)
- 8 10YR2/2 黒褐色粘質土シルト 炭少量
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色+4/1 黄灰色細砂~極細砂 2.5Y4/2 暗灰黄色+4/1 黄灰色シルト
- 10 2.5Y6/1 黄灰色+6/2 灰黄色粗砂礫 φ3~20cmの礫多量
- 11 10YR6/8 明黄褐色粗砂 (地山)
- 12 2.5Y6/1+5/1 黄灰色細砂~粗砂
- 13 2.5Y6/1 黄灰色+6/2 灰黄色細砂~極細砂 φ10~20cmの礫少量
- 14 2.5Y7/1 灰白色極細砂 (AT火山灰層)

図12 北壁断面図2 (1:100)



Y=-19,416

Y=-19,408

Y=-19,400

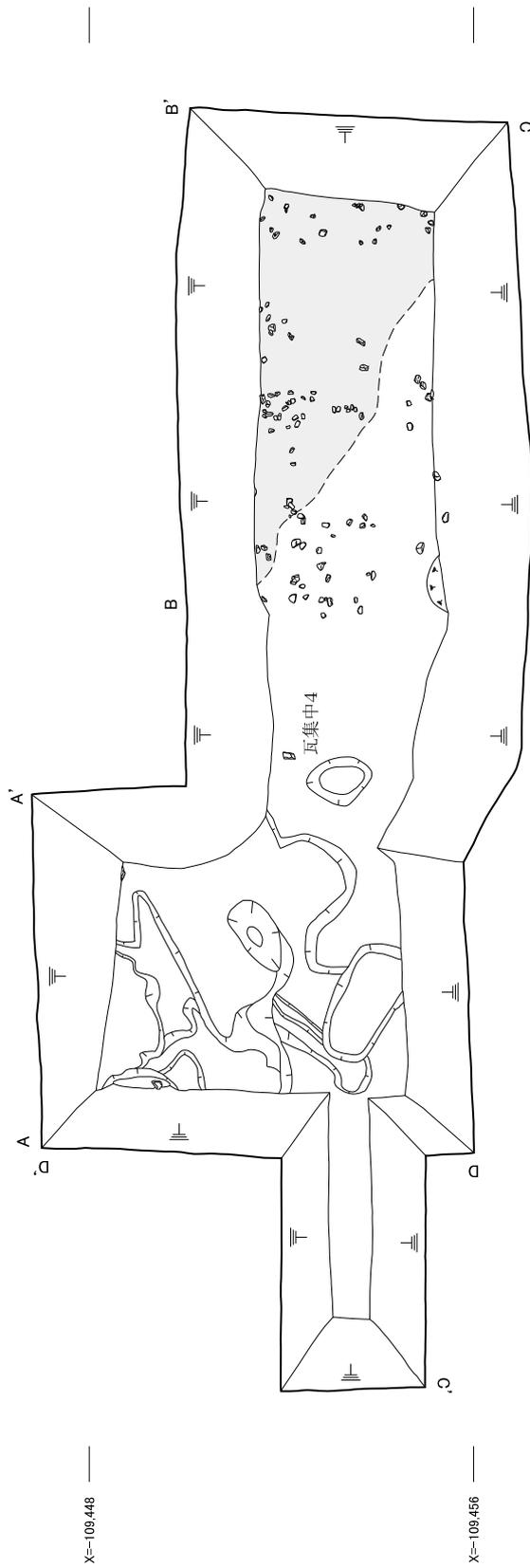


图13 調査区平面図 (1 : 150)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理用コンテナに54箱出土した。その内訳は土器・瓦類が53箱、石製品その他が1箱である。瓦類が大半で、次いで土器類である。石製品は加工痕がみられる凝灰岩片である。出土遺物の時期は、弥生時代、古墳時代、平安時代、室町時代、江戸時代の各時期である。平安時代後期の遺物が最も多く、それ以外のものは微量である。

弥生時代から古墳時代の遺物は極少量で、磨滅した弥生土器壺の底部、古墳時代の土師器・須恵器などがある。

平安時代の遺物は、池跡から出土している。土師器・須恵器・白色土器・黒色土器・土師質土器・瓦質土器・輸入陶磁器などの土器類、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦などの瓦類がある。1点であるが、墨書土器が出土している。

室町時代の遺物は微量で、池埋土上層（池土1）に混入した土師器が出土している。

江戸時代の遺物は、耕作溝などから出土している。土師器・施釉陶器・染付・棧瓦などがある。

(2) 瓦類（図14～18、図版3～5、付表1）

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦が池内から出土した。瓦の時期は平安時代後期のもので、軒丸瓦は全部で41点、軒平瓦は9点、鬼瓦が1点出土した。それら以外に完形もしくは完形に近い丸瓦・平瓦が出土している。軒丸瓦・軒平瓦の産地は播磨系（15点）、山城系（8点）、大和系（6点）、丹波系（2点）、河内系（1点）、産地不明（18点）のものがある。産地不明としたものは、瓦当面が剥離や磨滅、小片であるため文様が不明瞭なもの、または産地の特定ができなかつたものである。掲載した瓦の調整技法などについては、付表1の観察表にまとめた²⁾。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、土師器、須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、白色土器、 黒色土器、土師質土器、瓦 質土器、灰釉陶器、輸入陶 器、瓦、石製品		土師器29点、白色土器2点、土 師質土器1点、瓦質土器1点、 瓦38点		
室町時代	土師器		土師器1点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、染付、 瓦				
合 計		62箱	72点（7箱）	2箱	53箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

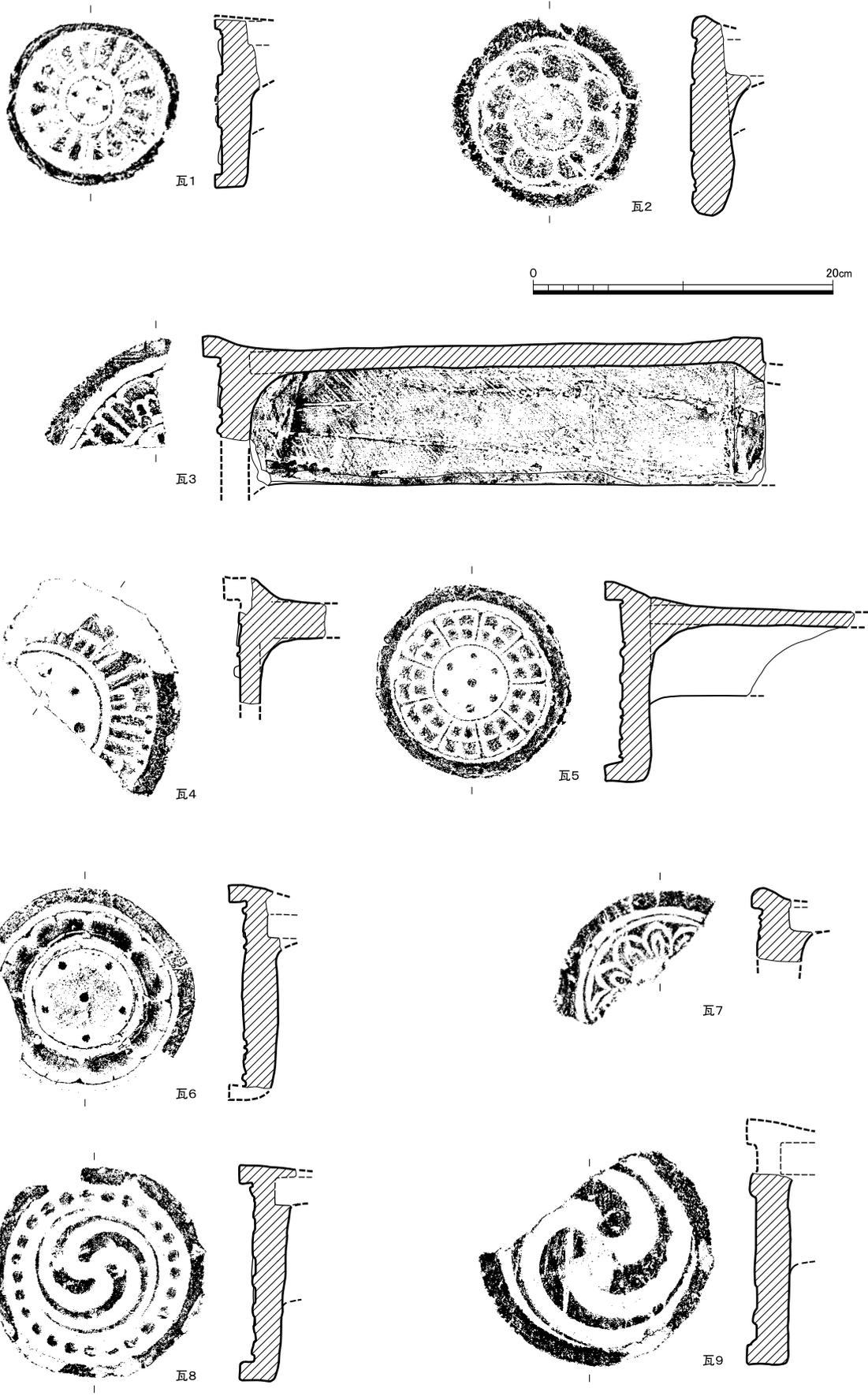


图14 瓦拓影·实测图1 (1:4)

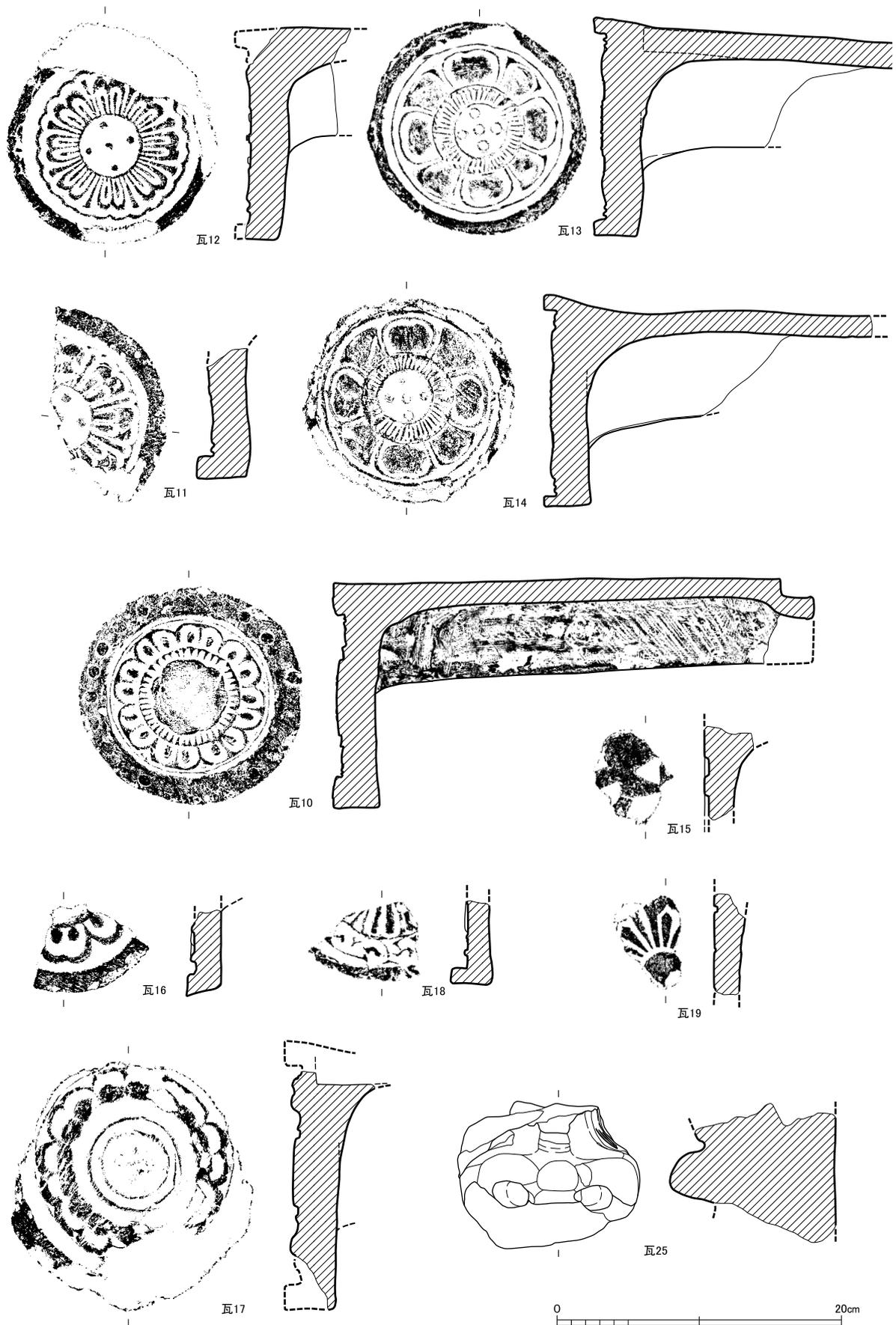


图15 瓦拓影·实测图2 (1 : 4)

1) 軒丸瓦 (1～19)

瓦1・2は山城系の軒丸瓦、複弁八弁蓮華文である。範の打ち込みが浅く、また磨滅している。平安時代後期のものと考えられる。

瓦3～6は播磨系の軒丸瓦である。瓦当面の文様は蓮華文、瓦3・4は複弁八弁、瓦5は複弁九弁、瓦6は単弁である。焼成は非常に硬質で須恵質である。瓦3は調査1・2出土瓦と同文である。

瓦7～9は産地不明である。瓦7は同文の瓦が仁和寺から収集されており、単弁十二弁蓮華文と推測される。瓦8・9は巴文である。

瓦10～15は大和系の軒丸瓦である。瓦当面の文様は蓮華文、瓦10～12は複弁八弁、瓦13・14は単弁四弁、瓦15は梵字文瓦である。瓦13・14は範傷などから同範と思われるが、文様は180度回転している。瓦15は梵字の「ア」字の一部である。調査33では多数の梵字瓦が出土しており、その梵字分類図から梵字丸F種と思われる。

瓦16は河内系の軒丸瓦で、同文の瓦から中房に巴文がつくと思われる。河内系の瓦はこの1点である。

瓦17～19は産地不明である。瓦17は複弁八弁蓮華文、調査1や旧勸業館敷地内で収集された瓦と同文である。磨滅しているため中房は不明瞭であるが、1+4の蓮子がみられる。瓦18は瓦当面の文様は複弁蓮華文、外区に唐草が巡る。瓦19は剣頭状の花弁をもつ単弁蓮華文である。弁の彫りはシャープである。同文の瓦は八弁で1+4の蓮子がつく。調査1・2から出土している。

2) 軒平瓦

軒平瓦は全部で9点の出土である。軒丸瓦に比べて出土量は少ない。

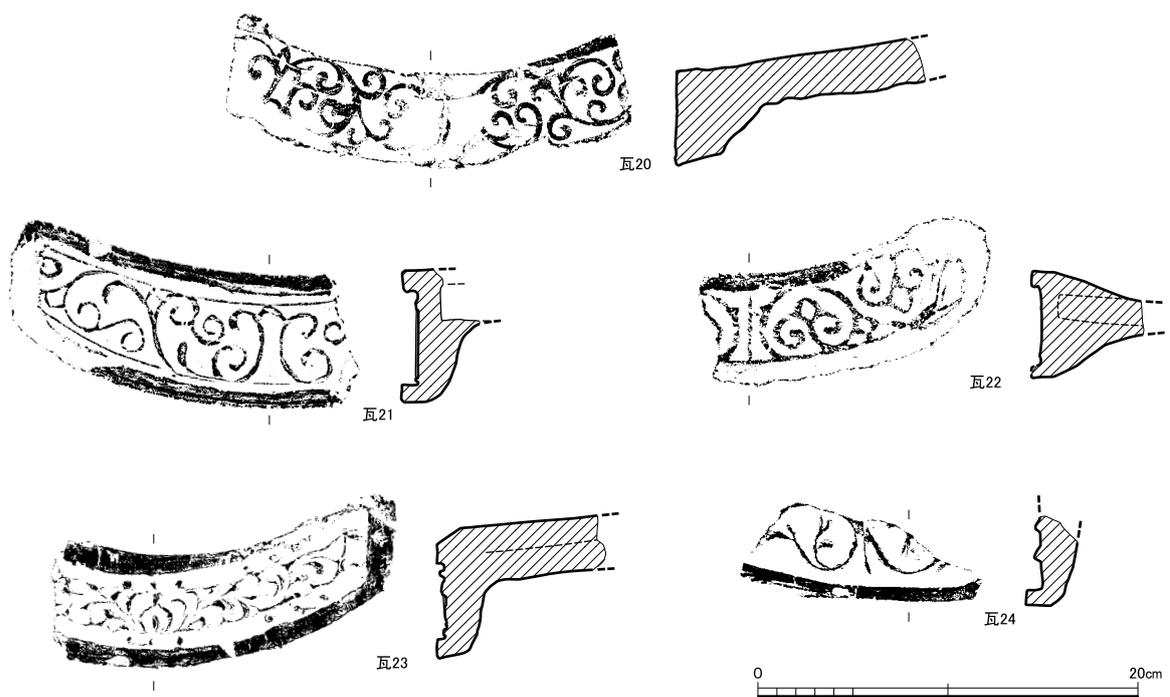


図16 瓦拓影・実測図3 (1:4)

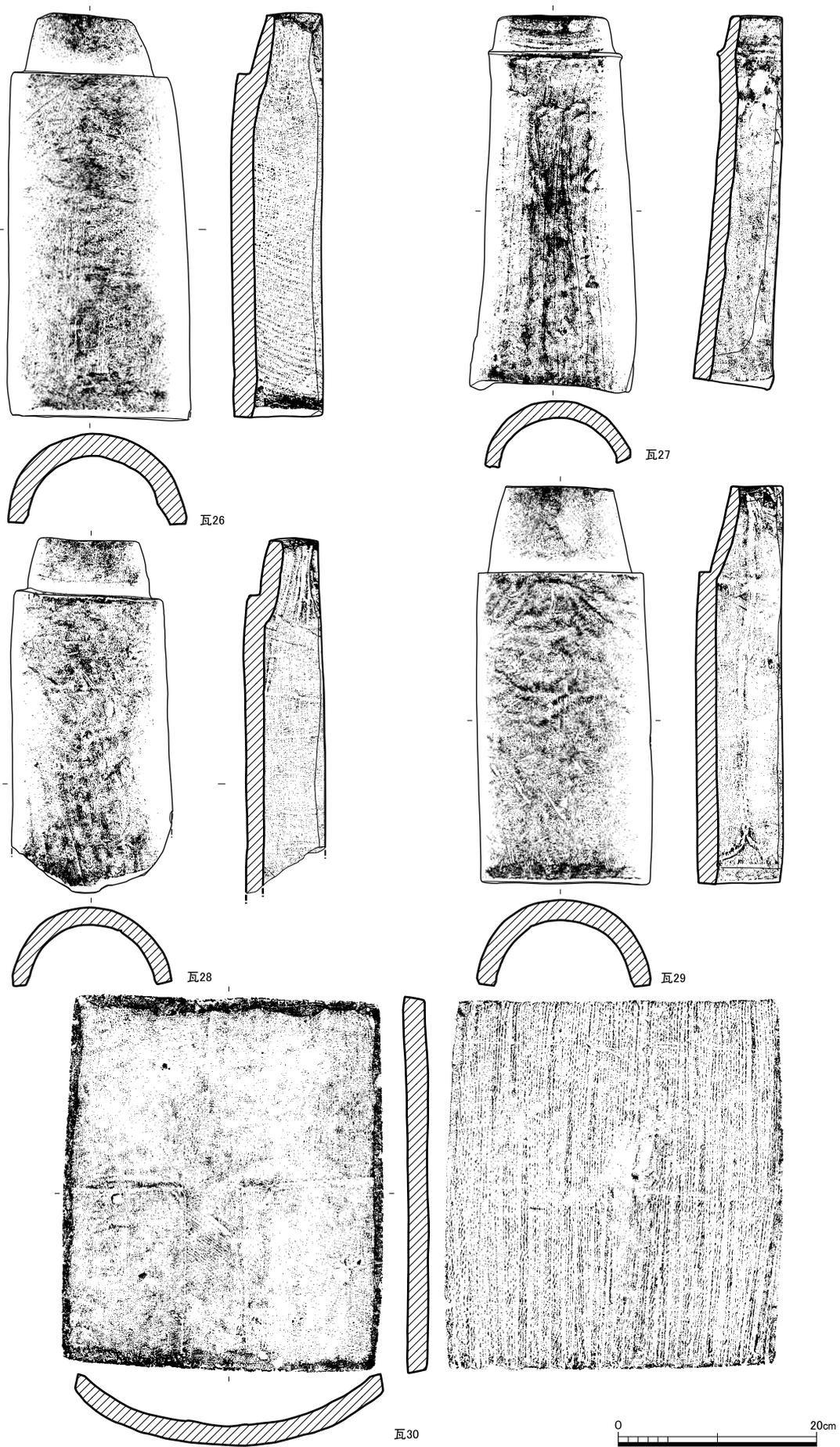


图17 瓦拓影·实测图4 (1:6)

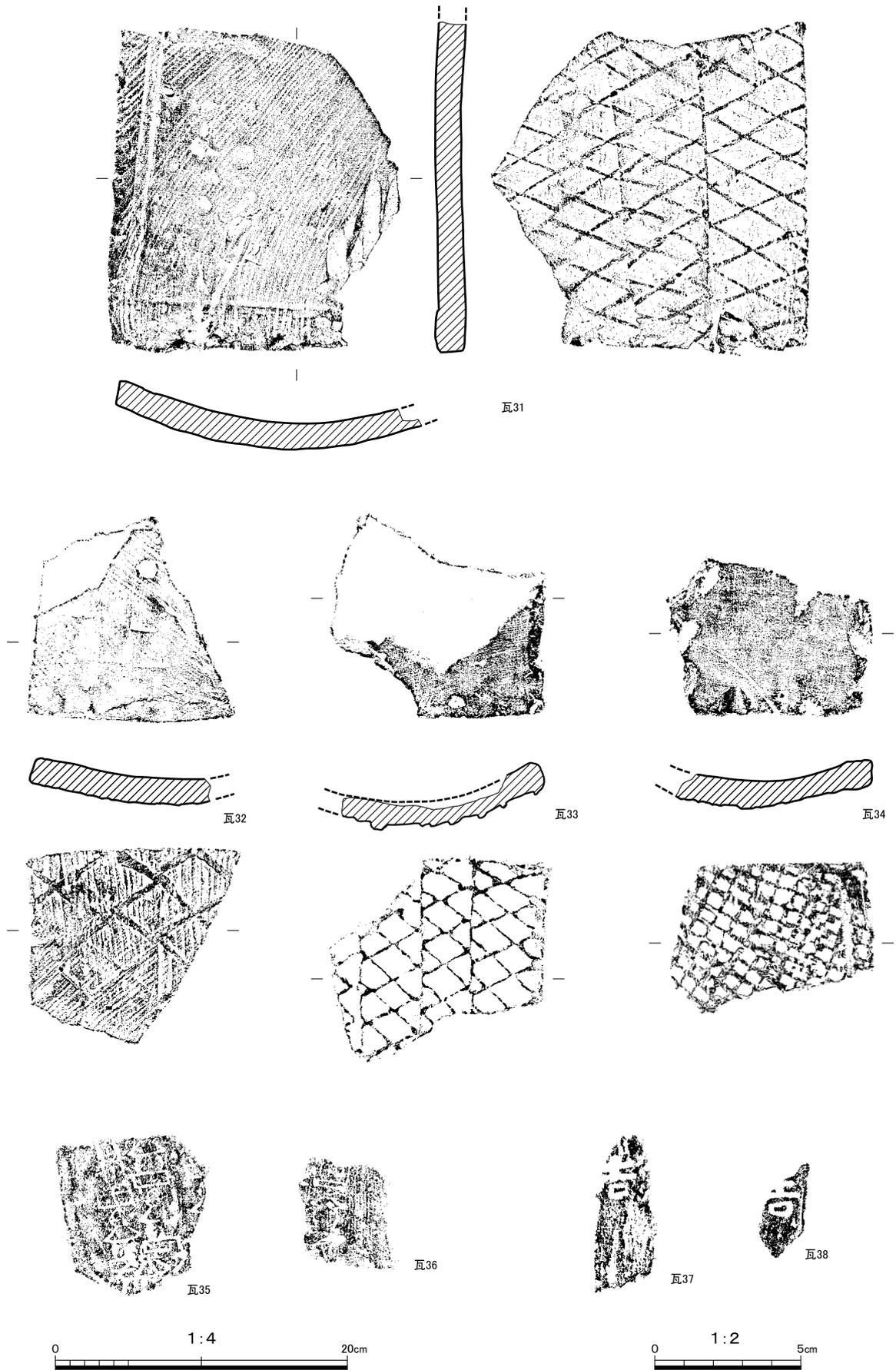


図18 瓦拓影・実測図5 (1:4、瓦37・38のみ1:2)

瓦20は山城系（森ヶ東瓦窯）、瓦当面の文様は唐草文が両側から展開する内向唐草文である。平安時代中期のものと考えられる。平安時代中期の瓦はこの1点である。

瓦21・22は播磨系の瓦、瓦当面の文様は中心から外側へ展開する外行唐草文である。瓦21・22はともに尊勝寺出土瓦と同文である。

瓦23・24は丹波系の瓦、瓦23の瓦当面の文様は中心から外側へ展開する外行唐草文である。瓦24は不明である。

3) 鬼瓦

鬼瓦は1点出土した。瓦25は鬼面の鼻の部分である。鼻梁は11.6cmと非常に高い。表面は磨滅しているため調整などは不明である。

4) 丸瓦・平瓦

瓦26～28は播磨系の丸瓦、26・27は完形である。瓦28は凹面に布目の継ぎ目が顕著に残る。瓦29は山城系の可能性が考えられる丸瓦、完形である。

瓦30～36は平瓦、瓦30は完形で、凸面は縄目タタキ、凹面には布の端部をマツリ縫いした痕跡が明瞭に残る。瓦31～34はいずれも凸面が格子タタキである。瓦31・32は凹面にコビキ痕、瓦33・34は布目である。

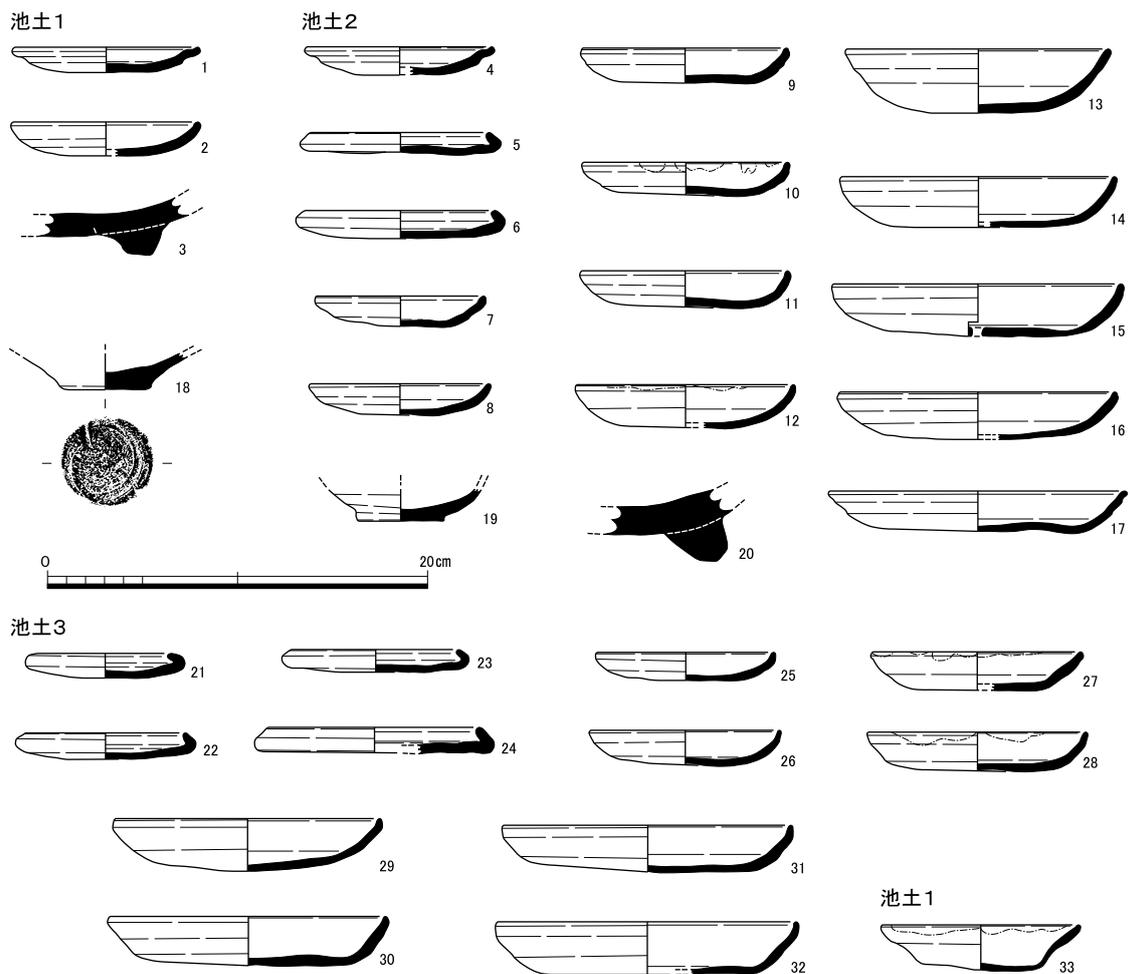


図19 土器実測図（1：4）

瓦35・36は平瓦の凹面に五輪塔文が押捺されたものである。調査2・33など法勝寺の調査で出土している。

瓦37は平瓦の端部、瓦38は丸瓦の小口部分に「吉」が印刻されている。「吉」字は上の「土」部分の下線の長い字体である。調査2から同様の印刻された瓦が出土している。

(3) 土器類 (図19～21、図版6、付表2)

土器類は池埋土上層(池土1)、池埋土下層(池土2)、池堆積土(池土3)に分類して取り上げたが、ほぼ同時期の平安時代後期(5B期³⁾)に収まる。池土2からは墨書土器が出土している。また1点であるが、室町時代後半(9B期)の土師器皿(33)が出土している。この土師器皿は、他の土器群とは大きく時期がかけ離れており、池の上面から切り込む遺構の混入品の可能性がある。それ以外では自然堆積層から磨滅した弥生土器壺の底部、古墳時代の土師器・須恵器などが出土した。江戸時代の土器類は耕作溝から出土している。以下に主要な遺物の概略を述べる。墨書土器については別項で記載した。掲載した遺物の詳細は付表2に示した。

池土1出土土器(1～3・33) 1・2は口径9.5・9.7cmの土師器皿、1は今回の出土遺物の中でもやや古いものである。3は瓦質土器火舎の脚部である。33は土師器皿、口縁端部に煤が付着するため灯明皿と思われる。

池土2出土土器(4～20) 4～17は土師器皿、5・6は口径9.3・9.9cmのコースター状の皿、7・8は口径8.8・9.3cmの小型、9～12は口径10.7～11.4cmの中型、13～17は口径13.8～15.5cmの大型の皿である。10は口縁端部に煤が付着する。13は器高3.4cmと深めである。17は口縁部に2段ナデが明瞭にみられ、体部が外反する。18・19は白色土器、18は底部外面糸きり、19は体部外面から高台にかけてヘラケズリ調整を施す。20は土師質土器火舎の脚部である。4・17は一段階古い様相を残す。

池土3出土土器(21～32) 21～32は土師器皿で

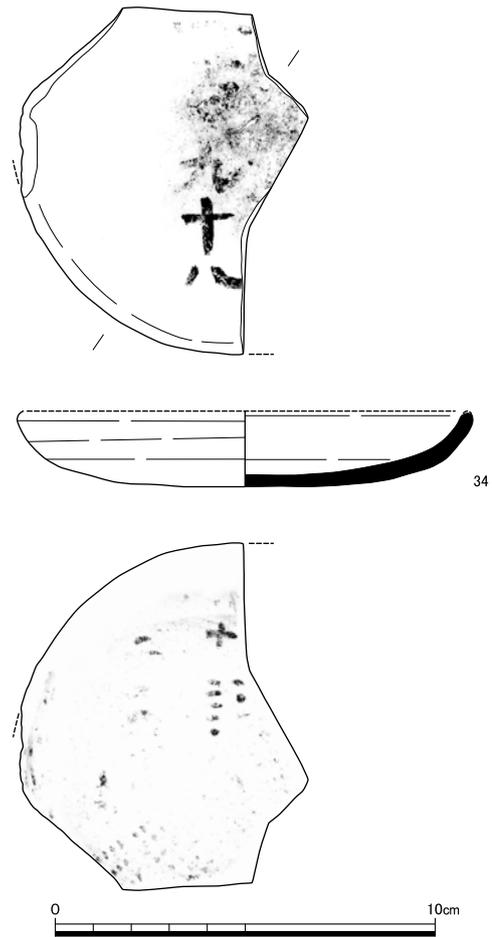


図20 墨書土器実測図(1:2)

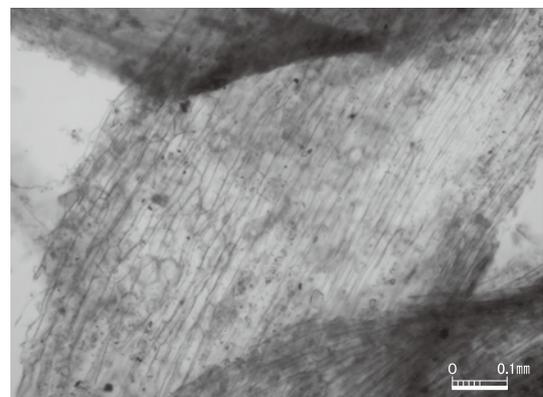


図21 墨書土器(34)付着麻繊維顕微鏡写真

ある。21～24はコースター状の皿、21～23は口径7.0～9.4cm、24は口径11.0cmと大型である。25・26は口径9.3・9.9cmの小型、27・28は口径10.9・11.4cmの中型、29～32は口径13.9～15.7cmの大型である。27・28は口縁端部に煤が付着する。

墨書土器 (34) 口径11.8cmの中型の土師器皿である。口縁端部の一部は後世に削られ、平坦面をもつ。内面に赤外線写真により「□□九十八」の文字が確認できた。皿内にはフェルト状の麻の繊維が付着していたが、布や紙などの製品としたものではない。外面には墨書による点が2列に描かれ、「十」字状のものが1箇所描かれる。池土2の粘質土層から出土した。

5. まとめ

今回の調査では、岡崎遺跡に関する遺構は自然堆積層の砂礫層から弥生時代から古墳時代の土器を少量採取したのみで、遺構の検出には至らなかった。

1989年に実施した動物園内北西部の調査18では、約2万9千～2万7千年前に降灰した火山灰層(AT)を踏み込む偶蹄目の足跡が発見されている。今回の調査でも同様の火山灰層が検出されたため、その面とさらに下面で遺構・遺物及び動物の痕跡の検出を試みた。しかし、遺物は全く検出せず、いずれの面も凹凸が激しく、明確な痕跡は検出できなかった。

平安時代後期に造営された法勝寺関係の遺構は、調査区の全域で池跡を検出したことにより、想定どおり園池跡に位置することが確認できた。池内からは平安時代後期の土師器皿や瓦が多数出土した。また、調査区北西部隅において、池底部が北西方向に向かって浅くなる様相がみられ、調査37から調査41で検出している汀に連続する可能性も考えられる。

今回の調査地である京都市動物園内は、法勝寺推定地の南半部にあたる。京都市動物園内を含み法勝寺推定地では、これまで多数の調査を実施してきた。調査地の北東では、1972年に六勝寺研究会が調査(調査2)を実施し、洲浜を備えた園池の東汀が確認されたのが法勝寺の遺構が発見された最初である。その後、池の汀+もしくは汀と考えられるものは13箇所検出され、池や堆積層も多数検出されている(図22)。

法勝寺については、これまで寺域や伽藍配置など、様々な検証や復元がなされてきた。なかでも池跡については西田直二郎氏により、明治19年作製の塔の壇付近の地籍図の水田と畑地の農地利用から、低地となる水田が法勝寺の池跡になるのではないかと推察され、池が法勝寺推定復元図に描かれている。調査2で検出した池の東汀の位置は、福山敏男氏の復元図によると「塔ノ壇及び池ノ内町水田低地図」の旧池の東岸と重なる⁴⁾。

近年、動物園内での発掘調査により、八角九重塔基壇の掘込地業や阿弥陀堂基壇の版築の一部が見つかった。また、それらの調査や試掘調査、詳細分布調査により池跡が検出され、池の復元に新たな知見を得ている。平成23年度・24年度詳細分布調査報告では、前述の「塔ノ壇及び池ノ内町水田低地図」に、これまでの調査で検出した池及び汀の位置を重ねた図を作成し、追認している。

今回、それらの成果で得た池の上面、池底を柱状図で表した（図23）。従来、法勝寺の池は自然地形により、北東部に取水口があると思われ、南西方向に排水していたと考えられている⁵⁾。

今回の調査を含め調査43から調査33は、八角九重塔のある中島から北東方向に広がる池である。調査33では中島の西汀を検出しており、調査36bでは北汀を、調査35b・cでは東汀を検出している。調査33の池底の標高は49m、調査36bの池底は49.3m、調査35bは48.4mと、この周辺では最も高くなる。調査34c・39b～dは中島の北西の池で、池底の標高は49m前後である。池底は北西から緩やかに南へ下がり、調査36cでは48.3mとなる。全体としては自然地形にあった池底の形状であるが、池の水位や細部の意匠がどのようなようであったか、今後の調査に期待がかかる。

註

- 1) 上村和直「院政と白河」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 瓦については以下を参照した。
『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
『平城宮発掘調査報告Ⅰ 伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第十冊 奈良国立文化財研究所 1961年
円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上・下）」『佛教藝術』82・84 1971・1972年
六勝寺研究会「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
上村和直「平安後期の瓦」『平安京提要』角川書店 1994年
- 3) 平尾政幸『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 4) 西田直二郎『法勝寺遺址』京都府史跡勝地調査報告 第六冊 京都府 1925年
福山敏男「白河院と法勝寺の歴史」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ 京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 5) 家原圭太「法勝寺跡・岡崎遺跡2 No.90・91」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年

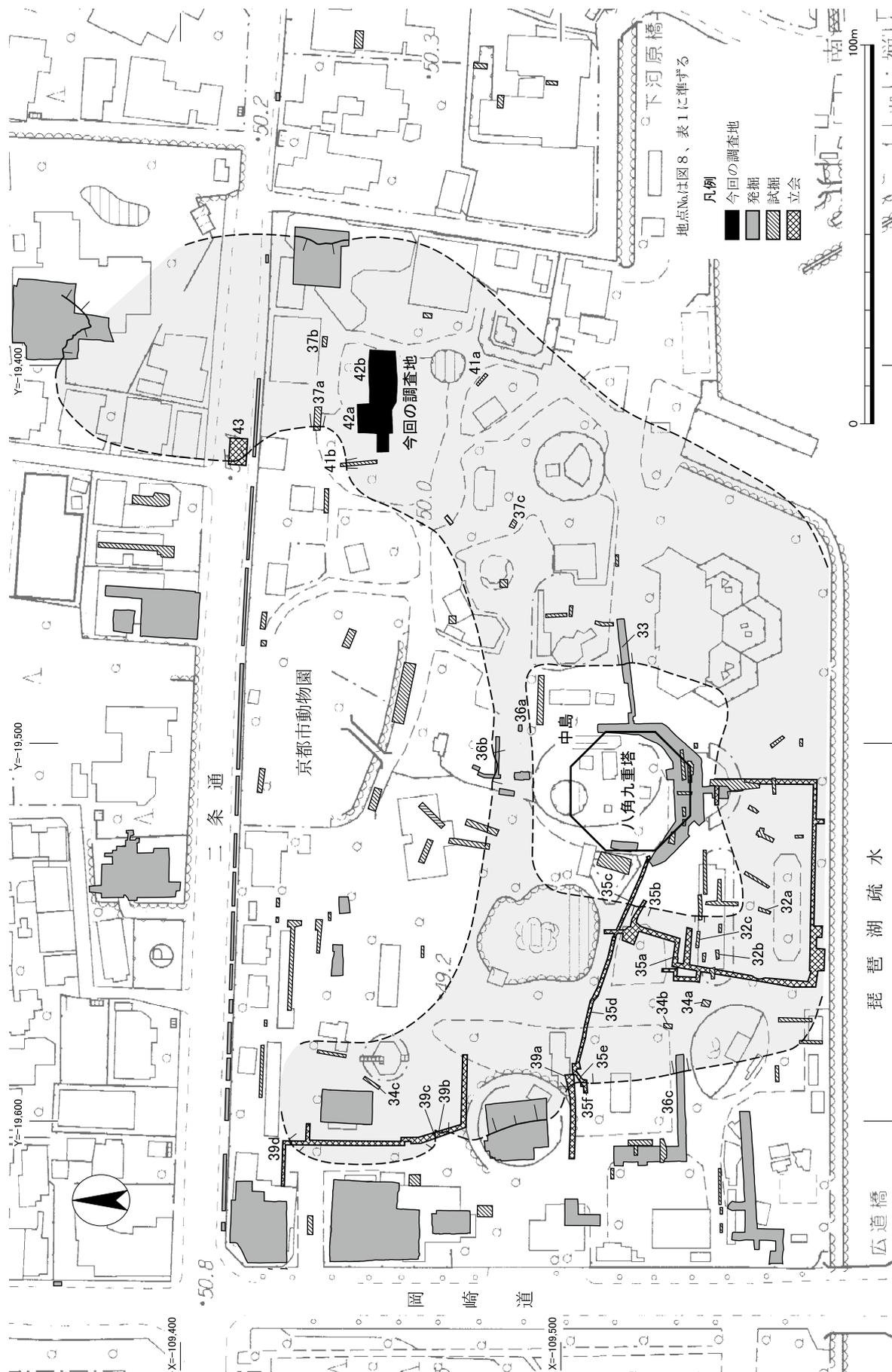


図22 池検出地点位置図 (1 : 1,500)

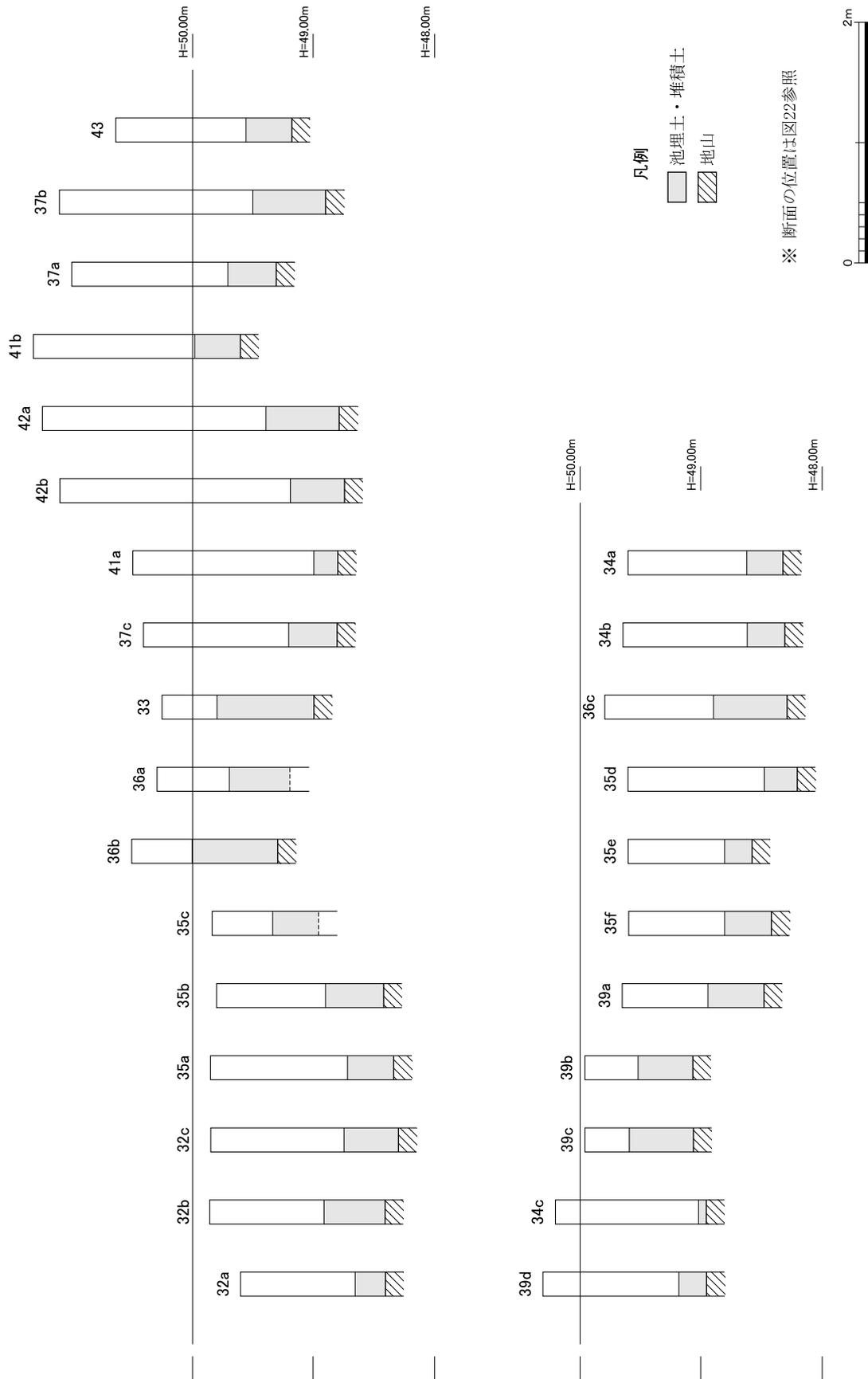


図23 池検出地点土層柱状図 (1 : 50)

付章 京都盆地東部に位置する白河街区跡・法勝寺跡・ 岡崎遺跡の地質

小野映介（新潟大学）・河角龍典（立命館大学）

1. はじめに

法勝寺の池跡の発掘調査後、遺構面の下位の層序・層相を確認する機会を得た。深掘り調査によって、周辺遺跡と同様に始良 Tn (AT) と推定される火山灰が検出されるとともに、その上位と下位の有機物試料から放射性炭素年代値を得たので報告する。

2. 層相・層序

調査区の南西部に深掘りトレンチを設定し、北断面に現れた遺構土および、その下位の層相・層序について観察を行った。観察断面は N35° 00' 47.79" : E135° 47' 14.03" に位置し、標高は 47.43 m - 48.73 m である。（これより上部の層相・層序は調査区西壁で確認した）

観察断面の最下部は中粒砂からなる。それを層厚約 32 cm の細粒砂が覆う。細粒砂層は泥を含むとともに全体的に有機質で、上部の約 5 cm は有機物の含有量が特に多い。その上位には層厚約 36 cm の有機質泥（シルト）が認められる。この層には木片や炭化物が少量包含されている。同層はシャープな境界をもって層厚約 9 cm の極細粒砂混じりの細粒砂に覆われる。また、その上位には層厚約 3 cm の有機質泥（シルト）が認められる。

それを覆うのは、層厚約 8 cm の火山灰層である。この層には上方細粒化が認められる。下部は中粒、上部は細粒である。さらに火山灰層の上位には、層厚約 3 cm の細粒砂混じりの泥と層厚 2 cm の泥が認められる。前者は有機質で、木片や炭化物が含まれる。これらの層は、層厚約 7 cm の火山灰層によって覆われている。この火山灰層には砂粒が多く含まれる。

その上位には、層厚約 50 cm の極粗粒砂の堆積が認められる。同層には石英が多く含まれており、また層厚数 cm の極細粒砂がレンズ状に挟在する。加えて、木片や炭化物の混入も見られる。

3. 堆積物の放射性同位体年代

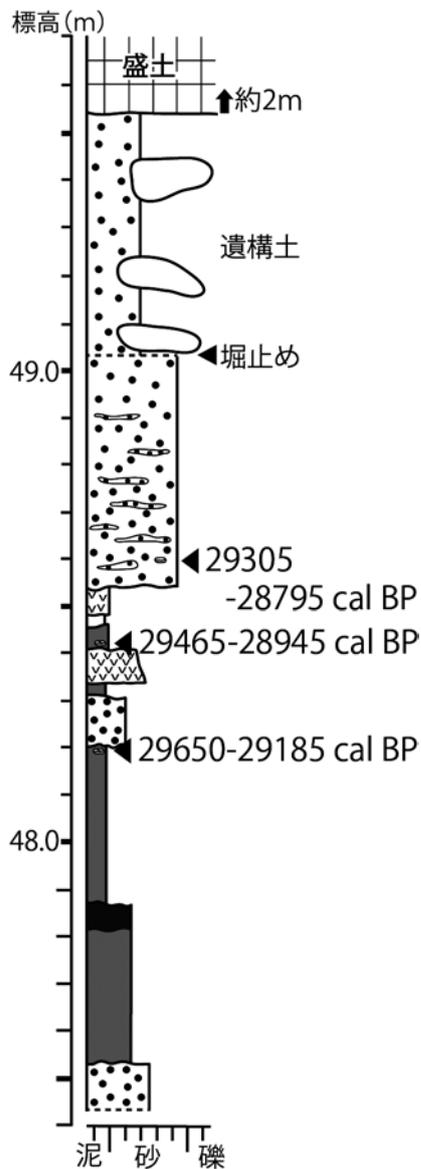
調査断面から採取した 3 点の植物遺体について放射性同位体年代を実施した。測定は（株）地球科学研究所に依頼し、暦年較正には INTCAL13 が用いられた。

標高 48.2 m の有機質泥に含まれた植物遺体からは 29,650 - 29,185 cal BP、標高 48.42 m の細粒砂混じりの泥に含まれた植物遺体からは 29,465 - 28,945 cal BP、標高 48.58 m の極粗粒砂に含まれた植物遺体からは 29,305 - 28,795 cal BP の値が得られた。

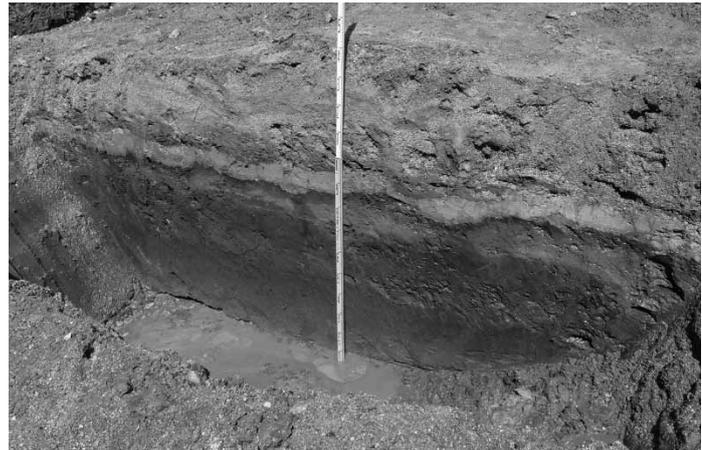
4. 考察

遺構下の有機質細粒堆積物に火山灰が挟在するのは、京都盆地東部の岡崎地区に共通して認められる状況である。現在、本遺跡で採取した火山灰の同定分析を依頼中であるが、その上位と下位の放射性同位体年代、周辺で確認されている火山灰がすべて始良 Tn であることから、この火山灰は始良 Tn である可能性が極めて高い。

また、火山灰の堆積後に岡崎地区では粗粒砂（いわゆるマサ）の流入が確認されているが、同様の堆積環境が本遺跡でも確認された。この粗粒砂層の堆積時期の解明は、当地域における考古学および地理学の共通課題の一つである。延勝寺跡の発掘調査で検出された同層からは弥生時代相当の放射性炭素年代が得られているが、本遺跡では、29,305-28,795 cal BPと古い値が得られた。この差異の意味については、今後、当地域で行われる発掘調査のなかで明らかにしていく必要がある。



深掘り断面の地質柱状図



深掘り断面北壁全景



土壌化層を覆う火山灰層

付表1 瓦観察表

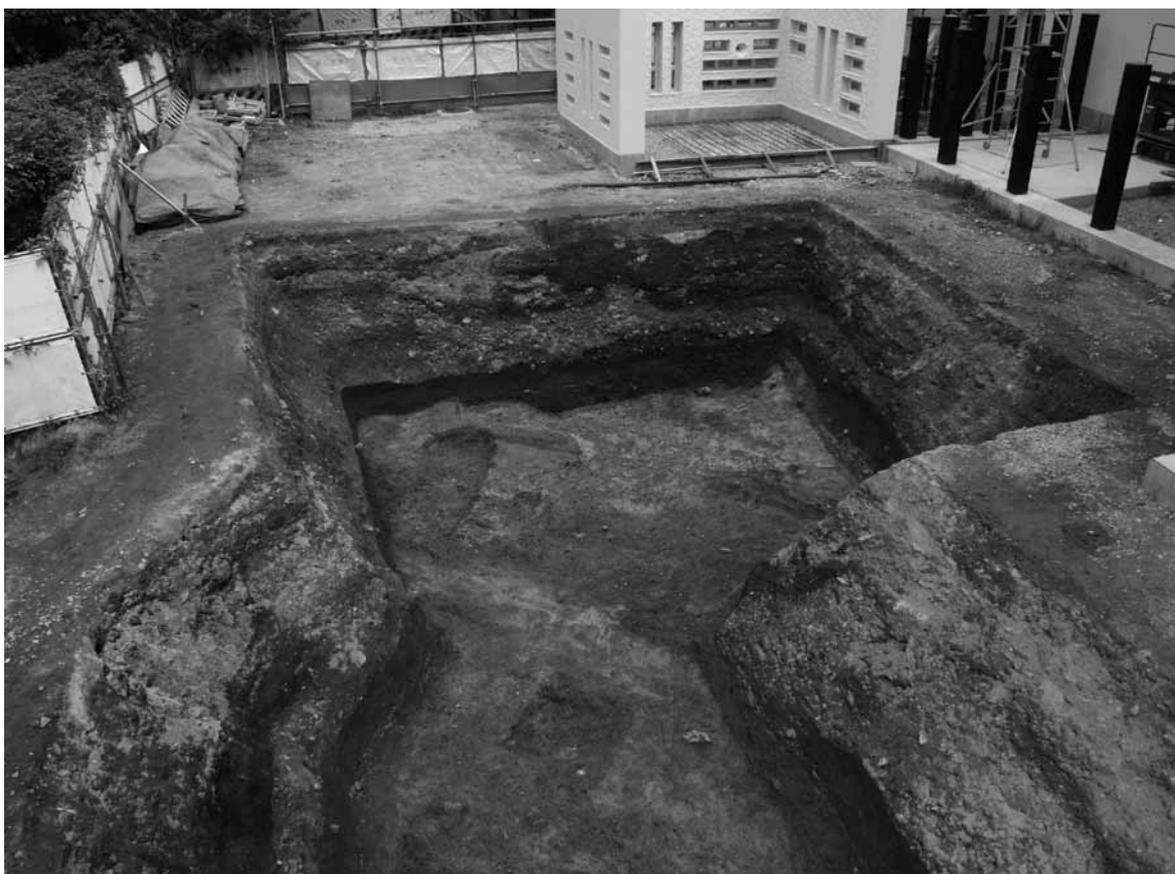
No.	出土遺構	種類・文様	色調・胎土・焼成	調整・特徴	備考
瓦1	池土1	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N6/0灰色、胎土密、焼成硬質	範の打ち込みが浅い。瓦当部裏面ナデ、下面ケズリ。	山城系
瓦2	池土2	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成やや軟質	蓮弁は互いに接し、子葉はやや盛り上がる。瓦当部裏面ナデ、下面ナデ。	山城系
瓦3	池土2	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N2/0黒色、胎土密、焼成硬質	花文は三弁一単位、子葉あり。弁間文あり。	播磨系 円勝寺ER001型式
瓦4	池土3	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	瓦3と同文。瓦当部裏面・下面ナデ。丸瓦部凸面・凹面・側面ナデ。	播磨系
瓦5	池土3	軒丸瓦 複弁九弁蓮華文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	瓦当面に離れ砂付着。瓦当部裏面ナデ、上・下面ナデ。丸瓦部凸面・側面縦方向のケズリ、凹面ナデ。	播磨系(林崎三本松窯) 円勝寺SR019型式
瓦6	池土2	軒丸瓦 単弁八弁蓮華文	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	中房はやや盛り上がり圏線が巡る。弁端に稜がある。瓦当部裏面ナデ、上下面ナデ。	播磨系(神出窯) 尊勝寺73A型式、 木村捷三郎収集瓦図録 398と同文
瓦7	池土2	軒丸瓦 単弁蓮華文 (十二弁か)	N2/0黒色、胎土密、焼成硬質	同文から十二弁と思われる。間弁は三角で一部連続する。瓦当部裏面ナデ、上下面ナデ。	木村捷三郎収集瓦図録 783と同文
瓦8	池土3	軒丸瓦 三巴文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	左巻き巴、頭・尾は接しない。珠文は密。瓦当部裏面オサエ、下面オサエのちナデ。	
瓦9	池土2	軒丸瓦 三巴文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	右巻き巴、頭は接しない。瓦当部裏面・下面オサエのちナデ。	
瓦10	池土2 (瓦集中4)	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	中房は花形、周囲に蕊帯が巡る。周縁に不規則な珠文が巡る。瓦当部裏面ナデ、丸瓦部凸面縄目タタキ、凹面コビキ、布目痕あり。側面ケズリ。	大和系 円勝寺ER008型式
瓦11	池土2 (瓦集中4)	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	凹型中房、棒状の間弁、子葉あり。瓦当部裏面・下面ナデ。	大和系 円勝寺ER002型式
瓦12	池土2	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	凹型中房、棒状の間弁あり。瓦当部裏面ナデ、丸瓦凸面縦方向のケズリ、凹面ナデ。	大和系
瓦13	池土2	軒丸瓦 単弁四弁蓮華文	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	中房周囲に蕊帯が巡る。弁間文は花卉と同規模。瓦当部裏面ナデ、丸瓦部凸面縄目タタキ、側面ケズリのちナデ。範傷から瓦14と同範と判明。180度回転する。	大和系 円勝寺ER024型式
瓦14	池土2	軒丸瓦 単弁四弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	中房周囲に蕊帯が巡る。弁間文は花卉と同規模。瓦当部裏面ナデ、丸瓦部凸面縄目タタキ、側面ケズリのちナデ。範傷から瓦13と同範と判明。180度回転する。	大和系 円勝寺ER024型式
瓦15	池土3	軒丸瓦 梵字文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	「ア」字の上部。瓦当部裏面ナデ。	大和系 調査33のF種か
瓦16	池土3	軒丸瓦 複弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	蓮弁は接し、蓮弁・子葉は凸線。瓦当部裏面・下面ナデ。同文から中房に巴文を配すると思われる。	河内系
瓦17	池土2	軒丸瓦 複弁八弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	磨滅が著しく蓮子は不明瞭、中房周囲に圏線が巡る。蓮弁は互いに接し、子葉が2つ盛り上がる。瓦当部裏面、下面ナデ。	円勝寺ER012型式 木村捷三郎収集瓦図録 513と同文
瓦18	池土2	軒丸瓦 複弁蓮華文	N2/0黒色、胎土密、焼成硬質	外区に唐草文巡る。瓦当部裏面・下面ナデ。	
瓦19	池土3	軒丸瓦 単弁蓮華文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	凹型中房。剣頭状の花卉、弁の彫りはシャープ。瓦当部裏面ナデ。	円勝寺SR086型式 尊勝寺86型式
瓦20	池土2	軒平瓦 内向唐草文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	両側から中心に唐草が2転し、支葉を巻き込む。瓦当上面ケズリ、顎部横ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦ナデ。	山城系(森ヶ東瓦窯)
瓦21	池土2	軒平瓦 外向唐草文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	中心は背向きC字形で、上に山形を配する。唐草は両側に展開。支葉を強く巻き込む。范ズレあり。瓦当部側面ナデ。裏面ナデ。離れ砂付着。	播磨系(神出窯) 尊勝寺232型式
瓦22	池土1	軒平瓦 外向唐草文	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	唐草文の主葉は大きく反転し、支葉は巻き込む。瓦当側面ナデ、裏面ナデ。	播磨系(神出窯) 尊勝寺233型式
瓦23	池土1	軒平瓦 外向唐草文	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	唐草は両側へ展開。主葉小さく反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文が3個ずつ巡る。瓦当部上面ケズリ、顎部から平瓦凸面にかけて縄目タタキ。凹面は布目。	丹波系 円勝寺ER108型式
瓦24	池土2	軒平瓦 唐草文	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	瓦当裏面上半ナデ。	丹波系 尊勝寺150型式
瓦25	池土3	鬼瓦	2.5Y7/1灰白色、胎土密、焼成硬質	残存部厚さ11.6cm、磨滅が著しく調整は不明。	鼻部分
瓦26	池土2	丸瓦(完形)	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	凸面縄目タタキのちナデ。側面横ケズリ。凹面コビキ痕、布目。	播磨系
瓦27	池土2 (瓦集中4)	丸瓦(完形)	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	凸面縦ケズリのちナデ。側面横ケズリ。凹面離れ砂付着。	播磨系

No.	出土遺構	種類・文様	色調・胎土・焼成	調整・特徴	備考
瓦28	池土1	丸瓦	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	凸面縦ケズリのちナデ。側面横ケズリ。凹面布目。布のマツリ縫い痕が明瞭に残る。	播磨系
瓦29	池土1	丸瓦(完形)	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	凸面縦ケズリのちナデ。側面横ケズリ。凹面コビキ、布目痕。	山城系か
瓦30	池土2 (瓦集中4)	平瓦(完形)	N3/0暗灰色、胎土密、焼成硬質	凸面縄目タタキ。側面ケズリ。凹面布のマツリ縫い痕が明瞭に残る。	山城系
瓦31	池土2	平瓦	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	凸面格子タタキ、凹面コビキ痕あり。調整具痕跡が明瞭。	
瓦32	池土2	平瓦	N6/0灰色、胎土密、焼成硬質	凸面格子タタキ、凹面コビキ痕あり。	
瓦33	池土2	平瓦	7.5Y7/1灰白色、胎土密、焼成硬質	凸面格子タタキ、凹面布目。調整具痕跡が明瞭。	
瓦34	池土2	平瓦	N7/0灰色、胎土密、焼成硬質	凸面格子タタキ、凹面布目。調整具痕跡が明瞭。	
瓦35	池土1	平瓦 五輪塔文印刻	7.5Y5/1灰色、胎土密、焼成硬質	凹面布目。凹面に五輪塔押捺。	
瓦36	池土2	平瓦 五輪塔文印刻	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	調整は不明瞭。凹面に五輪塔押捺。押捺浅い。	
瓦37	池土1	平瓦 文字印刻	N4/0灰色、胎土密、焼成硬質	「吉」印であるが、字の上部は「土」と同じく下線が長い。	調査2で出土瓦38と同じ
瓦38	池土3	丸瓦 文字印刻	N5/0灰色、胎土密、焼成硬質	玉縁の小口に「吉」印。字の上部は「土」と同じく下線が長い。	調査2で出土瓦37と同じ

付表2 土器観察表

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器	皿	池土1	9.5	1.3	80	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
2	土師器	皿	池土1	9.7	1.8	25	10YR7/3にぶい黄橙色、胎土密、1mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
3	瓦質土器	火舎	池土1	—	(3.0)	脚部のみ	2.5Y7/3灰浅黄色、胎土密、長石・チャート・雲母含む、焼成良	
4	土師器	皿	池土2	8.8	1.9	60	2.5Y7/3浅黄色、胎土密、1mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
5	土師器	皿	池土2	9.3	1.2	100	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、3mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
6	土師器	皿	池土2	9.9	1.5	100	10YR8/4浅黄色、胎土密、3.5mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
7	土師器	皿	池土2	8.8	1.7	60	2.5Y8/2灰白色、胎土密、3.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
8	土師器	皿	池土2	9.3	1.7	40	2.5Y8/2灰白色、胎土密、0.5mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
9	土師器	皿	池土2	10.7	1.9	40	10YR7/3にぶい黄橙色、胎土密、1.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
10	土師器	皿	池土2	10.7	1.8	80	10YR7/2灰黄色、胎土密、2mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	灯明皿
11	土師器	皿	池土2	10.8	2.0	90	10YR8/3浅黄橙色、胎土密、1.5mm以下の長石・雲母・赤色粒含む、焼成良	
12	土師器	皿	池土2	11.4	2.3	25	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	灯明皿
13	土師器	皿	池土2	13.8	3.4	40	2.5Y7/3浅黄色、胎土密、2.5mm以下の石英・チャート含む、焼成良	
14	土師器	皿	池土2	14.3	2.7	40	10YR8/3浅黄橙色、胎土密、4mm以下の長石・石英・チャート含む、焼成良	
15	土師器	皿	池土2	15.1	2.8	40	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、8mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
16	土師器	皿	池土2	14.4	2.5	40	2.5Y7/浅黄色、胎土密、2mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
17	土師器	皿	池土2	15.5	2.3	80	10YR7/3にぶい黄橙色、胎土密、3mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
18	白色土器	皿	池土2	(4.8)	(1.9)	底部のみ	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1.5mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	底部糸切り
19	白色土器	皿	池土2	(4.4)	(1.7)	底部のみ	2.5Y8/2灰白色、胎土密、1mm以下の長石・石英・チャート含む、焼成良	外面ケズリ
20	土師質土器	火舎	池土2	—	(3.8)	底部のみ	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、3mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
21	土師器	皿	池土3	7.0	1.3	40	10YR7/3にぶい橙色、胎土密、0.5mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
22	土師器	皿	池土3	9.4	1.4	100	2.5Y8/2灰白色、胎土密、2mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
23	土師器	皿	池土3	8.8	1.2	40	2.5Y8/2灰白色、胎土密、1mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
24	土師器	皿	池土3	11.0	1.4	20	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
25	土師器	皿	池土3	9.3	1.5	100	2.5Y8/2灰白色、胎土密、2mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	
26	土師器	皿	池土3	9.9	1.9	100	2.5Y8/2灰白色、胎土密、5mm以下の長石・石英・チャート含む、焼成良	
27	土師器	皿	池土3	10.9	2.1	25	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1.5mmの長石・石英・チャート・雲母含む、焼成良	灯明皿
28	土師器	皿	池土3	11.4	2.1	50	2.5Y8/2灰白色、胎土密、2mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	灯明皿
29	土師器	皿	池土3	13.9	2.8	60	2.5Y7/3浅黄色、胎土密、1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
30	土師器	皿	池土3	14.5	2.6	90	2.5Y7/3浅黄色、胎土密、2mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	
31	土師器	皿	池土3	15.1	2.5	90	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、1.5mmの長石・石英・チャート含む、焼成良	
32	土師器	皿	池土3	15.7	2.8	25	2.5Y8/2灰白色、胎土密、2mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含む、焼成良	
33	土師器	皿	池土1	10.3	2.6	80	2.5Y8/2灰白色、胎土密、1mm以下の長石・チャート・雲母含む、焼成良	灯明皿
34	土師器	皿	池土2	11.8	2.0	40	2.5Y7/2灰黄色、胎土密、4mm以下の長石・チャート・赤色粒含む、焼成良	墨書土器

圖 版



1 調査区西半部全景（東から）



2 調査区西半部西区全景（東から）



3 調査区西半部 瓦出土状況（南から）



1 調査区東半部全景（東から）



2 調査区東半部 瓦出土状況（西から）



3 調査区東半部 池土3検出状況（西から）



瓦類 1



瓦20



瓦21



瓦22



瓦23



瓦24



瓦25



瓦35



瓦26



瓦30



1



5



6



10



17



22



25



26



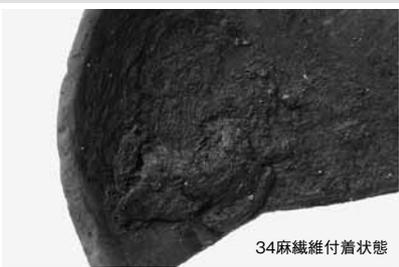
30



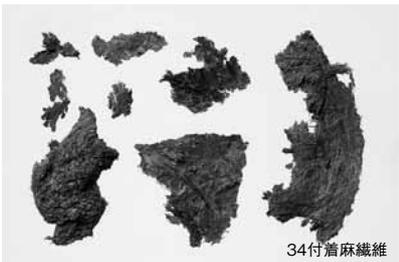
31



34



34麻纖維附着状態



34附着麻纖維

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・ほっしょうじあと・おかざきいせき							
書名	白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-6							
編著者名	近藤章子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいくあと 白河街区跡	きょうとしさきょうく 京都市左京区	26100	417	35度 00分 48秒	135度 47分 14秒	2014年8月 25日～2014 年9月24日	190㎡	動物園 整備工事
ほっしょうじあと 法勝寺跡	おかざきほうしょうじちやう 岡崎法勝寺町		417-1					
おかざきいせき 岡崎遺跡	(京都市動物園)		418					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	弥生時代 ～古墳時代		弥生土器、土師器、須 恵器		調査区全域で平安 時代末期から鎌倉 時代の法勝寺園池 を検出した。		
法勝寺跡	寺院跡	平安時代	池	土師器、須恵器、白色 土器、黒色土器、土師 質土器、瓦質土器、灰 釉陶器、輸入陶器、瓦、 石製品				
岡崎遺跡	集落跡	室町時代		土師器				
		江戸時代	耕作溝	土師器、施釉陶器、染 付、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-6
白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡

発行日 2014年12月26日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961